



SYNTHESIS 2015

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 2015



INDEX

01	研究所概要	01
02	月例研究報告	07
03	ランゲージラウンジ活動報告	35
04	研究プロジェクト	41
05	研究業績	61

01

研究所概要

01

2015年度教養教育センター付属研究所概要

I. 組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：嶋田彩司

主任：三角明子 高木久夫

研究部門運営委員：大森洋子 黒川貞生

◆研究所所員

池上康夫 石井友子 石渡周二 猪瀬浩平 植木献 上野寛子 大森洋子 亀ヶ谷純一 金珍娥

黒川貞生 洪潔清 嶋田彩司 杉崎範英 鈴木義久 徐正敏 高木久夫 高桑光徳 武光誠

田中祐介 張宏波 鄭栄桓 永野茂洋 名須川学 野副朋子 原宏之 原田勝広 福山勝也

三角明子 森田恭光 寄川条路 渡辺祐子 MacLellan Dawn Vallor Molly

土屋博嗣 土屋陽祐 齋藤里美 濱野早紀

◆研究員

可部州彦 松山建作 柴田美香

◆研究所運営委員会 (* = 代表者)

・『SYNTHESIS』(年報)担当：*嶋田彩司 三角明子 高木久夫

II. 研究活動

1. 研究プロジェクト (* = 代表者)

◆青少年の有酸素体力と体格に関する研究

*森田恭光 福山勝也 越智英輔

◆「教養教育としてのカフェ」研究：カフェ・ネットワークの構築とその意義

*三角明子 植木献 上野寛子 猪瀬浩平

◆パワー系スポーツ選手における下肢筋腱形状の特徴に関する研究

*黒川貞生 亀ヶ谷純一 杉崎範英

◆動物愛護分野でのソーシャル・インパクト・ボンド適用の有効性

*原田勝広 高木久夫

◆「対外漢語教育拠点」大学における留学生向け中国語課外教育に関する調査研究

*渡辺祐子 張宏波 洪潔清

2. 研究報告会

日付	報告者	テーマ
第一回 (5/13)	猪瀬 浩平	「灰の記憶：東埼玉資源環境組合の焼却灰問題に見る〈内側の辺境〉の再生産過程」
	杉崎 範英	「ヒト生体内組織画像化による筋肉の形と活動の観察」
第二回 (6/10)	石井 友子	「語彙習得研究の目指すもの」
	金珍娥	「談話論と文法論 ー日本語と韓国語を照らす」
第三回 (7/1)	田中 祐介	「近代日本の日記文化と自己表象ー旧制第二高等学校『忠愛寮日誌』を中心にー」
	野副 朋子	「植物の鉄栄養の研究～不良土壌の緑化を目指して～」
第四回 (10/14)	洪潔清	「コミュニケーション能力の向上を図る授業づくりー留学生を招く交流型学習の試みー」
	徐正敏	「李樹廷と日本キリスト教との関係」
第五回 (11/11)	モリー・ヴァラー	「天龍寺造営に関する再考察」

III. 教育活動

《学内語学試験》

	校舎	日付	受験者数	受験者合計
TOEIC IP試験				
〈第一回〉	横浜	6 / 24 (水)	88名	197名
	白金	6 / 27 (土)	109名	
〈第二回〉	横浜	10 / 21 (水)	104名	220名
	白金	10 / 17 (土)	116名	
〈第三回〉	横浜	12 / 16 (水)	79名	157名
	白金	12 / 12 (土)	78名	
TOEFL ITP試験				
〈第一回〉	横浜	6 / 17 (水)	120名	222名
〈第二回〉	横浜	10 / 7 (水)	102名	

《講座》

◆短期講座・通年講座◆

	DELE試験 準備講座	夏季DELE試験 準備講座 文法・語彙/ 実践編	春季DELE試験 準備講座 文法・語彙/ 実践編	ドイツ語 検定講座 (3級)	ドイツ語 検定講座 (4級)	ハングル能力 検定試験対策 講座(5級)
実施期間	春学期 秋学期	夏季休暇中 (短期集中)	春季休暇中 (短期集中)	春学期 秋学期	秋学期	春学期 秋学期
実施期間	5/13～7/1 10/7～12/2	9/7～9/11	2016/3/7～ 3/11	5/7～6/25 10/1～11/19	9/23～11/18	4/21～6/9 9/29～11/24
校舎	白金	白金	白金	白金	横浜	横浜
曜時限	水曜5限	文 10～13時 実 14～17時	文 10～13時 実 14～17時	木曜5限	水曜5限	火曜4限
回数	各8回	各10コマ (2コマ×5日)	各10コマ (2コマ×5日)	各8回	全8回	全8回
講師	Eugenio del Prado	文 仲道 慎治 実 Eugenio del Prado	文 仲道 慎治 実 Eugenio del Prado	小山田 豊	佐藤 修司	朴美恵
募集人数	30名程度	30名程度	30名程度	20名程度	20名程度	20名程度
エントリー 者数	春：8名 秋：11名	文法・語彙編 ：11名 実践編：9名	文法・語彙編 ：7名 実践編：7名	春：9名 秋：4名	秋：3名	春：3名 秋：3名
2015年度 毎月 出席者数 (名)	5月(5・3・3) 6月(2・4・2・3) 7月(3) 10月(8・6・5・4) 11月(1・3・3) 12月(2)			5月(7・4・5・5) 6月(5・5・4・4) 10月(3・2・3・3・2) 11月(3・2・3)	9月(3・4) 10月(2・4・2・2) 11月(4・0)	4月(3・2) 5月(2・2・2・2) 6月(2・2) 9月(3) 10月(2・2・2・2) 11月(1・2・1)

2015年度教養教育センター付属研究所概要

ハングル能力 検定試験対策 講座(4級)	中国語コミュニ ケーション検定 講座 (4級)	中国語コミュニ ケーション検定 講座 (3級)	中国語コミュニ ケーション検定 講座 (4級)	手話特別講座	キャンプ インストラクター 資格取得講座
春学期 秋学期	春学期 秋学期	春学期 秋学期	春学期 秋学期	春季休暇中 (短期集中)	
4/21～6/9 9/29～11/24	4/28～6/23 9/29～11/24	4/28～6/23 9/29～11/24	5/13～7/1 9/30～11/25	2016/3/14 ～3/18	2016/1/13
白金	白金	白金	横浜	白金	横浜
火曜4限	火曜4限	火曜3限	水曜3限	3・4限	5限
全8回	全8回	全8回	全8回	全10回	
李善姬	鈴木 健太郎	鈴木 健太郎	黄宇暁	荒木 泉 (ゲスト講師) 長田 静乃	塚脇 誠
20名程度	20名程度	20名程度	20名程度	各30名程度	
春：10名 秋：5名	春：4名 秋：5名	春：3名 秋：5名	春：4名 秋：4名	32名	3名
4月(7・8) 5月(4・5・5・5) 6月(4) 9月(4) 10月(3・3・3・3) 11月(2・1・1)	4月(4) 5月(4・3・3) 6月(3・3・2・1) 9月(5) 10月(5・4・4・2) 11月(3・1・1)	4月(2) 5月(3・2・2) 6月(1・1・2・2) 9月(2) 10月(3・2・2・2) 11月(2・1・1)	5月(3・3・3) 6月(3・3・2・2) 7月(2) 9月(1) 10月(2・1・1・1) 11月(1・0・1)		

◆TOEIC講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間（コマ数）	講師	受講者数
〈試験対策講座〉 春学期	白金	土3・4	5 / 23～6 / 20 (全10コマ)	長谷川剛氏	20名
〈試験対策講座〉 秋学期	白金	土3・4	11 / 7～12 / 5 (全10コマ)	長谷川剛氏	23名
〈夏季集中特訓講座〉 基礎コース	横浜	2・3	8 / 24～9 / 1 (全14コマ)	中村道生氏	19名
〈夏季集中特訓講座〉 実践コース	白金	2・3	8 / 24～9 / 1 (全14コマ)	長谷川剛氏	16名
〈春季集中特訓講座〉 基礎コース	横浜	2・3	2 / 22～3 / 1 (全14コマ)	中村道生氏	12名
〈春季集中特訓講座〉 実践コース	白金	2・3	2 / 18～2 / 26 (全14コマ)	長谷川剛氏	29名

IV. その他

《公開講演会》

日付	校舎	講演テーマ	講演者	受講者数
7 / 10	横浜	変化する北朝鮮の宗教	金興洙氏 韓国牧固大学教授	60名

《刊行物》

- ・ 明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 『SYNTHESIS 2015』 3月発行

02

月例研究報告

02

灰の記憶：東埼玉資源環境組合の焼却灰問題に見る〈内側の辺境〉の再生産過程

猪瀬 浩平

巨大都市は、その外側だけではなく、内側にも〈辺境〉をつくる。小熊英二は、中央／辺境という概念が実体ではなく、関係の中で作られ、だから、「辺境」は地理的な意味での東京にも存在するとしている（小熊2012）。本発表は「辺境」との距離を問題にするために、外側と内側と言う区分で分析を試みることで、中央と辺境との〈間〉を考える。2011年3月に始まる東京電力の原子力発電所の事故とそれがもたらした放射能による広範囲の汚染は、廃棄物をめぐる首都圏と東北の不均衡な関係を露にするとともに、首都圏内部で廃棄物が集積される〈辺境〉の存在を浮かび上がらせた。埼玉県東部のゴミ処理場が立地する過程と、その中で忘却されようとする土地の記憶を描く。

戦後、一極集中によって膨張する首都圏にとって、東北は外側の辺境として食糧・都市労働力・鉱物資源そしてエネルギーの供給地であり続けた。一方、屎尿処理場、屠畜場、ごみ処理場、火葬場といった施設は、そこで行われる事柄の必然性から、首都圏の内側につくられる。外側の辺境が地理的遠さによってその存在を目立たなくされているように、内側の辺境は人があまり立ち入らない場所にされたり、人が目を背けるように否定的に意味づけられたり、あるいは一見のどかな装いをまとわされたりしながら、いずれにしろ人びとが素通りするように整備されていく。そして内側の辺境と外側の辺境とされた場所を、まさに〈辺境〉に押しやる構造を不可視なものにしていく。本発表において、外側の辺境とは東北に作られた最終処分場であり、内側の辺境とは東京の郊外都市につくられたごみ処理場である。そして、外側の辺境と内側の辺境が結託してしまう可能性を持った瞬間に着目する。

2011年7月11日——千葉県流山市のごみ焼却施設で排出され、秋田県大館市にある廃棄物処理場で処理される予定の焼却灰に、基準の3・5倍の放射性セシウムが含まれていたことが判明した。この事件が、廃棄物をめぐる、首都圏と東北との非対称な関係を可視化した（原山2014）。本論集で高村竜平は、焼却灰の受け入れる側に置かれた秋田県北東部「北鹿地域」に焦点をあてて、この問題の分析を試みている。

これに対して、本発表は首都圏の内側で、廃棄物を受け入れてきた地域に焦点を当てた。埼玉県越谷市東部地区を取り上げて、廃棄物処理場が立地する歴史的過程を素描した。その上で、その傍らで農業を長年営んできた住民のライフストーリーに着目し、首都圏と東北との間にあるごとを捉えるための視座を探り、中央と辺境をめぐる議論をより動的に描写することを目指した。

「ヒト生体内組織画像化による筋肉の形と活動の観察」

杉崎 範英

概要

ヒトの運動はすべて筋肉の収縮によって引き起こされる。そのため、高い生活の質を保ったり優れた運動パフォーマンスを実現したりするためには、筋肉の機能（強さや速さなど）が高いレベルにあることが重要となる。筋肉の機能に影響する要因は様々あるが、特に形状（太さや長さ）が大きな影響を及ぼす。本報告では、これまでに超音波法やMRI法を用いて生体内における筋肉の形状を計測し、それと運動パフォーマンスの関係などを検討してきた成果や、近年行っている、筋肉の活動状態の観察を通じた効果的なトレーニング方法の検討に関する研究の一部について紹介した。

全身の骨格筋は様々な形状をしており、この骨格筋の形状（筋形状）は機能と密接に関係している。代表的な筋形状の指標として、筋線維長、羽状角、筋横断面積、筋体積、腱長などが挙げられ、これらはそれぞれ、筋の収縮速度、筋張力の伝達効率、筋力、あるいは関節トルクなどを決定する要因となる。そのため、筋形状の個人差や筋間差を調べることは人の身体運動パフォーマンスについて検討する際の重要な課題となる。

人の筋形状を直接的に調べる方法として、古典的には屍体を解剖して調べる方法が用いられてきた（図1）。しかしなら、屍体解剖による筋形状の測定には、対象数が限定されること、固定処理等による組織の変性等の問題があるほか、測定された筋形状と身体運動パフォーマンスとの関係が不明であるという致命的な欠点がある。一方、近年では超音波法や磁気共鳴画像（MRI）法などによって生体内組織を画像化することが可能となっている。超音波法は、臓器の健康状態や胎児の観察などによく用いられるが、同様の装置を用いて、骨格筋の形状を観察することができる。超音波法では、筋形状のうち、筋線維長や羽状角、腱長といったデータを取得することに優れており（図2）、特に運動中様々に変化する筋形状をリアルタイムで観察することができるという大きな利点がある。発表者はこれまでに、超音波法による筋腱形状の観察を通じて、反動を用いた動作にお



図1 屍体解剖による筋形状の測定。 両矢印は筋束長、角度は羽状角を示す。

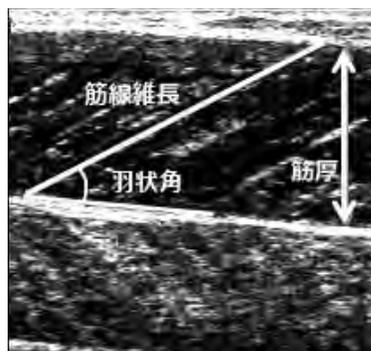


図2 超音波法による筋形状の測定。

るパワー増強効果のメカニズムについての研究 (Sugisaki et al. 2005) や、筋の活動が腱組織の振る舞いに及ぼす影響を明らかにする研究 (Sugisaki et al. 2011) などを行ってきた。

一方、MRI法を用いた測定では、四肢や体幹部の横断画像（輪切りの画像）を取得することから、筋の断面積あるいはその積分としての筋体積のデータを得ることができる（図3）。また近年では、機能的MRI法という撮像法を用いることで、形状だけでなく筋活動の部位や筋活動の程度を観察することができるようになってきている（図4）。この手法を用いた研究の一例として、発表者は、スクワットトレーニングにおける下肢筋群の活動を観察し、同じスクワット動作を用いたトレーニングとして分類されるエクササイズであっても、軽負荷高速度で行われるジャンプトレーニングとバーベルを背負って低速度で行われるトレーニングエクササイズでは、下肢筋群の活動が異なり、前者では臀部筋や大腿部内側の筋の活動が高くなることを明らかにした (Sugisaki et al. 2014)。

以上のように、近年の生体内観察技術の発達により、骨格筋の形状は身体運動のパフォーマンスと密接にかかわっていることが実証されてきている。しかし、その一方で、骨格筋形状の個人差は、身体運動パフォーマンスの個人差全体の2割以下しか説明することができないこともわかってきている。このことは、身体運動パフォーマンスの個人差には、筋の形状以外の要因（例えば、筋の使い方などの神経系の要因や筋線維組成など）も大きくかかわっていることを示唆するものでもある。したがって、今後は、筋の形とともに筋の使い方の個人差などの情報も含めた包括的な分析を行い、身体運動パフォーマンスの決定要因や効果的なトレーニング方法の検討を進めていく必要がある。

参考文献

Sugisaki, N., Kanehisa, H., Kawakami, Y., & Fukunaga, T. (2005). Behavior of Fascicle and Tendinous Tissue of Medial Gastrocnemius Muscle during Rebound Exercise of Ankle Joint. *International Journal of Sport and Health Science*, 3, 100-109.

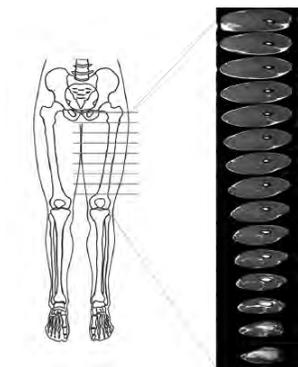


図3 磁気共鳴画像法による筋断面積・筋体積の測定。

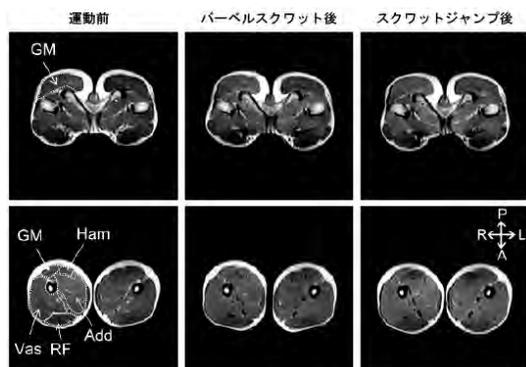


図4 機能的MRI法による筋活動の観察。上段：臀部、下段：大腿部。筋活動があると運動前と比較して白く描出される。

- Sugisaki, N., Kawakami, Y., Kanehisa, H., & Fukunaga, T. (2011). Effect of muscle contraction levels on the force-length relationship of the human Achilles tendon during lengthening of the triceps surae muscle-tendon unit. *Journal of Biomechanics*, 44(11), 2168-2171.
- Sugisaki N, Kurokawa S, Okada J, Kanehisa H (2014) Difference in the Recruitment of Hip and Knee Muscles between Back Squat and Plyometric Squat Jump. *PLoS ONE* 9(6): e101203.

「語彙習得研究の目指すもの」

石井 友子

研究分野概要

第二言語習得研究において、語彙習得は1990年代より大きな関心を集め、その研究成果は言語教育現場に様々な形で貢献をしてきた。英語教育に関して言えば、最大の貢献とも言える研究成果は、「どの語を学ぶことが一番有益か」という問いに答えることができるようになったことである。英語母語話者が知っていると言われる2万語全てを学ぶことは、一般的な英語学習者にとって現実的な学習目標ではない。本発表では、約4000語の知識があれば、新聞や小説など様々なジャンルの読み物に使用される単語のうち98%をカバーできることなどを紹介した。これは、90年代後半以降のコンピュータの大衆化に伴って明らかにされてきたことである。この「何（どの語彙）を学ぶべきか」という問いの他に、語彙習得研究は「どのように学ぶべきか」また、知識が「どのように貯えられるのか」、その知識を「どのように測定するべきか」等の多岐に渡る問いに答えるものであることを概観した。

意味的関連性の記憶への影響

数多ある語彙習得研究における問いの中で、「どのように学ぶべきか」に関連し、「意味的に関連する複数の単語を同時に学ぶと記憶が阻害される」という90年代後半より提唱されてきた命題を検証する研究を紹介した。Tinkham (1993; 1997) や Waring (1997) は、以下のような単語群の学習効率を検証し、意味的関連性は記憶に不利に働くということを示した。

語群1（意味的関連性あり）：*shirt, jacket, sweater*

語群2（意味的関連性なし）：*rain, car, frog*

この命題は広く信じられており、多くの語彙習得研究の入門書や、教員向けに書かれた書物に登場する。しかしながら、この命題を否定する実験結果を得ている研究も存在し（Papathanasiou, 2009 など）、必ずしも疑問の余地がないほどに強固な説というわけではない。

実験結果にばらつきが見られる要因は様々に考えられるが、本研究では、実験に使用される語群が持つ、形状の類似性に着目した。例えば Tinkham (1993) では、「意味的に関連のある語群」として金属名称（鉄、銅、スズ等）を使用しているが、これらは金属に関する素人にとっては、形状に実質的な差異を見出すことが難しく、その名称を記憶するのに困難が生じたとしても驚きはしない。この例は極端なものとしても、意味的に関連のある語群としてこれまで使用されてきたものには、丸みをおびたものが多い「果物」や、四つ足のものが多い「動物」、前開きで袖を通す形状が多い「衣類」等がある。このように意味的に関連するものをまとめた結果として、それらの単語が示すものの形状が類似することが少なくない。Baddely & Hitch (1974) 以来提示されてきたいくつかの心理学における記憶モデルに鑑みても、これらの類似性が記憶に不利に働く可能性は十分に考

えられる。このことから、これまで意味的関連性が記憶を阻害すると思われていたのは、実は実験に使用された語の一部が、形状が類似したものを示していたからではないかとの仮説を立てた。

この仮説のもと、以下のような3群の学習成果を検証した。

	意味的関連	形状的類似	例
語群1	なし	なし	「クリップ、スプーン、山」
語群2	あり	なし	「鶏、豚、ヘビ」
語群3	なし	あり	「地球儀、スイカ、ボール」

実験の結果、語群3は他のふたつの語群に比べて統計的に有意に学習成績が低いことが示され、記憶に不利に働く要因は、単語間の意味的関連性のものでなく、指示物の間にある形状的類似性であるとの仮説が支持された。実験の詳細については、Ishii (2015) を参照されたい。なお、発表者はこの仮説についてさらに多角的にデータを集め、検証を続けている。

参考文献

- Baddely, A. D. & Hitch, G. J. (1974). Working memory. In G. A. Bower (Ed.), *Recent Advances in Learning and Motivation* (Vol.8, pp.47-89). New York: Academic Press.
- Ishii, T. (2015). Semantic connection or visual connection: Investigating the real source of confusion. *Language Teaching Research*, 19 (6) 712-722.
- Papathanasiou, E. (2009). An Investigation of ways of presenting vocabulary. *ELT Journal*, 63 (2), 313-322.
- Tinkham, T.M. (1993). The effect of semantic clustering on the learning of second language vocabulary. *System* 21, 371-80.
- Tinkham, T. (1997). The effects of semantic and thematic clustering on the learning of second language vocabulary. *Second Language Research*, 13 (2), 138-163.
- Waring, R. (1997). The negative effects of learning words in semantic sets: A replication. *System* 25, 261-74.

研究発表報告『談話論と文法論 ——日本語と韓国語を照らす』について

きむじな
金珍娥

本研究発表は日本語と韓国語の〈話されたことば〉を、談話論と文法論という2つの観点から照らすという研究についての報告である。

第1章から第5章までは、〈話されたことば〉の実現体である〈談話〉の分析に入るための、原理や概念付け、デバイスの構築を行う。第6章から第7章、第8章は、実際のデータを考察して得られた、談話の姿、いわば赤裸々なことばの姿について述べる。

まず〈序論：談話論と文法論の結合〉では、本書の目的と共に、〈談話論〉と〈文法論〉を統合すべき根拠を述べた。そこで述べたことは、真の〈話されたことば〉を見るために、2つの分野に涉ることが必要であった著者の立場であり、本書を成立させた出発点である。

〈第1章：言語の存在様式と文体〉では、本書が扱っている対象に関わる概念を、より明確なものとするため、研究において頻繁に、あるいは半ば自明のもののようにも用いられてきた術語の再定義を行っている。そもそも「言語」と呼んで研究において実際に扱っているものは何なのか、「話されたことば」や「書かれたことば」とは何なのか、「話しことば」や「書きことば」とは？「談話」や「テキスト」とは？といった問いを問うことで、本研究に関わる既存の主な論考はこうした術語をどのように位置づけているのかを見て、再検討する。この過程を通じ、本書で用いる術語の概念規定は確固たるものとなり、〈話されたことば〉の実現体たる〈談話〉を見据える研究の、輪郭を得る。

〈第2章：談話論とは〉では、本書が取り上げる〈談話論〉の定義や位置付けを行う。〈プラグマティクス〉 pragmatics、〈会話分析〉 conversation analysis、〈談話分析〉 discourse analysisの成り立ちや既存の研究の定義を照らしつつ、この3つの分野を含むものとして〈談話論〉を位置付ける。そもそも〈会話分析〉、〈談話分析〉といった名付けは、研究の〈方法論〉をもって言語学の1分野を名付けている感がある。また諸研究がこれらの境界を区分しようと試みているものの、区別しにくい点も多い。本書では〈談話論〉という名称を用いることで、これらの分野が扱っている対象や方法を含みうる言語学の領域として位置づけたい。また〈談話〉の下位範疇を位置づけ、〈談話〉の多様性と広さを確認する。

〈第3章：研究方法論〉は、〈話されたことば〉の研究において、最も重要な核を成す〈データ収集の方法〉と〈分析方法〉を述べる。〈話されたことば〉によるデータは、〈そこに行けばある〉ものではなく、〈生の人間〉からしか採集できず、そうしたデータの採集はえも言われぬ苦渋に満ちている。2度目はないという一期一会の覚悟と緻密な計画で臨まねばならない。さらに得られた〈話されたことば〉を、分析するための〈書かれたことば〉に転換する作業、それはまさに〈言語音〉

を〈文字〉にする過程であり、この過程こそが〈書かれたことば〉とは異なる、〈話されたことば〉とは何かを教えてくれる研究の真髄でもある。こうして文字化された〈話されたことば〉の談話は、分析を行うために様々な単位として区切られる。

〈第4章：談話単位論〉では、〈文〉や〈turn〉を中心とした〈談話の単位〉について述べる。とりわけ本書では〈あいづち〉と〈turn〉に注目し、既存の研究とは異なって、〈あいづちもturnとして実現する〉ことを明らかにし、〈turn〉という概念を新たに位置づけ直す。また、〈文はどこで区切れるのか〉という、まさに〈話されたことば〉こそその問いを考え、〈区切れない第3種の文〉があることを取り上げる。

〈第5章：文構成論〉では、〈話されたことば〉の談話を織りなす〈文〉の構造を照射する枠組みを考える。とりわけ文の最も核心的な部分である〈文末〉に注目し、〈述語文〉と〈非述語文〉という分析の中心的な概念を導入する。既存の多くの文法研究でほとんど言及されてこなかった〈非述語文〉は、〈話されたことば〉の談話を通じ、その存在が揺るがない確固たるものであることを見る。

第6章から第7章、第8章は、実際のデータを分析した結果と、それについての考察を述べる。データは、東京方言話者、ソウル方言話者による、日本語会話40組、韓国語会話40組、2名ずつの対話からなる計80組の〈自由談話〉による談話データである。用いられる方言や20代、30代、40代の世代別と男女別など、条件が厳格に統制され、組み合わせられた異なり人数計160人の話者が参加してくださっている。

〈第6章：文の分布〉では、〈述語文〉と〈非述語文〉をそれらの使用率という観点から日本語と韓国語の両言語を照らす。そもそも日本語や韓国語の〈話されたことば〉の談話は、どのぐらいの数の文から構成されるのか。〈話されたことば〉における文においては 一体どれぐらいの文が述語で結ばれているのか。といった基礎的な考察である。

〈第7章：〈非述語文〉論〉では、談話において、述語（・・）で（・）結ばない（・・・・・）文（・）の実際の姿を照らす。第5章でも取り上げているが、文末を述語で結ばない文を、先行諸研究で述べているような「一語文」や「文の破片」などと捉えるのではなく、〈非述語文〉という観点からその出現様相を克明に調査する。形態論的な観点、統辞論的な観点、discourse syntax の観点から〈非述語文〉の解析を試みる。

「A：お住まいは？。— B：ずっと東京で。」

「A：男女比どのくらい？。— B：18人中2人とか。— A：あつしの学年も。」

といった例のように、談話の複数の話者の発話にまたがって現れ、相互作用の中で拡大される〈非述語文〉の現れ方を、“discourse syntax”（談話統辞論）という観点から照らしている。〈助詞〉類は、一般に文末に現れることを主とした働きとは見られていない。談話においては格助詞や係助詞なども文末に立ち、談話統辞論的な楽しい働きを見せてくれる。こうした〈談話統辞論的な機能〉もまた、談話の中に現れる〈非述語文〉の極めて自然な営みを物語るものである。

〈第8章：緩衝表現論〉では、日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話を成す〈文〉の文末に注目し、文末における〈緩衝表現〉の構造と類型を描く。〈緩衝表現〉とは、「一人です。」と言えるところを、「一人みたいな感じです。」のごとく表現するなど、明確さを失わせ、ぼかしたり、間接化する、〈話し手のモーダルな態度〉を示す表現を言う。〈述語文〉と〈非述語文〉という把握は、文を構造的な観点から見のものであった。〈緩衝表現〉はこれに対し、文を機能的な観点から見のものである。こうした機能的な表現の中に〈述語文〉と〈非述語文〉の中間的な姿を見せる文が多々存在することも、この章を通して発見できる。〈緩衝表現〉は「一人みたいな感じです。」といった短い文から、

「管理がずさんになっ {たり} とか} してんのかな} とか} 思っ} たんですけど。」

のように、幾つかの〈緩衝体〉がくっついた文までも多々存在する。実際に調べるとわかるように、〈緩衝表現〉はその形が非常に多様であるため、「たり」「とか」といった〈緩衝体〉は無秩序に配列されているようにも見える。しかし、こうした〈緩衝表現〉は実は、引用構造、連体修飾構造、否定の構造、アスペクト的、タクシス的な性質を有する構造、韓国語の-ㄷ(-te-)による体験法の構造など、様々な文法的な仕組みを生かし、豊かに形を造り上げてゆくのである。そこには〈剰余構造〉と〈欠如構造〉と呼ぶべき、構造上の原理的な装置の隠れていることが見えてくる。〈緩衝表現〉は、〈書かれたことば〉を中心に構築されてきた〈文法論〉の基本的な概念を広げうる言語現実ともなるであろう。

〈書かれたことば〉ではなかなか出会えない、第7章の〈非述語文〉と第8章の〈緩衝表現〉のこうした姿は、〈話されたことば〉が一体どのようなものであるかを、私たちにありありと見せてくれるのである。本研究は日本語と韓国語の〈話されたことば〉を照らす、ささやかな挑戦であり、試みである。

近代日本の日記文化と自己表象—旧制第二 高等学校『忠愛寮日誌』を中心に—

田中 祐介

キーワード：日記、書記文化、読書文化、史料論

歴史の中で、有名無名の無数の人々が日記を綴ってきた。人はなぜ日記を、特に自己について書き綴るのか。秘匿すべきものでありながら、どこかに読者の眼差しを意識して自己の煩悶や思索を綴る行為の意味とは何か。自発的に綴る日記もあれば、義務づけられ、点検者の逆鱗に触れる日記もある。最も日常的な書記行為としての日記とそれをめぐる文化現象の考察を通じて、近代日本の「書く歴史」を見つめ直したい。今回の報告では、報告者が取り組む科学研究費助成事業の概要を紹介するとともに、旧制第二高等学校のキリスト教主義学生寮である忠愛寮の寮日誌を分析する。

科学研究費助成事業の概要

2008年から2010年にかけて、報告者の恩師である故福田秀一氏（国文学研究資料館名誉教授、国際基督教大学元教授）が遺された5,000点を超える日記関連資料の目録化の責任役を務めた。資料の中には計492冊の日記帳の現物（多くが実際使用されたもの）が含まれており、これについては日記帳の種類、日記の記入期間、記入者の社会的属性、内容に関する特記事項を追記した目録を作成し、「近代日本の日記帳」と題して、2013年3月に公にした¹。この成果を踏まえ、従来の研究上の関心である近代日本の教養主義にも接続できるよう、特に青年知識層の自己形成に焦点を定めて立案し、採択されたのが、「未活字化の日記資料群からみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究」（若手研究 B、2014-2016 年度）の事業である。

事業の大目的として三本の柱を立てた。第一に、手書きの日記資料の目録化を進め、「ならべ読み」の環境を整備すること、第二に、手書きを含む日記資料群から特に青年男女が綴った「内面の日記」を選定、集中的に読解し、「国民教育装置」としての側面をもつ日記における自己形成の実態を分析すること、第三に、上記の個別研究を文学および隣接分野の研究成果に接合し、近代日本の青年知識層における自己形成を複眼的に考察する視座を獲得することである。

日記資料の目録化とその意義—「つづけ読み」から「ならべ読み」へ

上掲した大目的の第一点目の取り組みとして、千葉県八千代市を活動拠点とする「女性の日記から学ぶ会」収蔵の日記帳（約2,000-3,000冊）の目録化事業に取り組んでいる。これは、会の代表である女性史家の島利栄子氏との連携のもと、日記資料の将来の保管活用を見据え、基礎的なデータベースを作成する事業である。従来、個人の日記を通時的に読む「つづけ読み」は、著名人の日記のみならず、市井の人々の日記においても為されてきた。しかし、同時期に綴られた複数の日記を

¹ 田中祐介・土屋宗一・阿曾歩「近代日本の日記帳—故福田秀一氏蒐集の日記資料コレクションより—」『アジア文化研究』第39号、2013。

読み解く「ならべ読み」は、戦時下の日記を中心に成果が皆無ではないものの、基礎的なデータベースの未整備により、本格的な取り組みは為されていないのが現状である。今回の事業は同会の日記資料の目録化を通じて、将来にわたる資料の保管活用を見据えた基礎的情報の把握とともに、「ならべ読み」を可能とする環境の整備を狙いとする。ただし、日記資料は個人の記録であることから、個人情報保護の観点から安易な一般公開はできないことも勿論である。同会との協力関係のもと、具体的な活用方法は慎重に考える必要がある。

「近代日本の日記文化と自己表象」研究会

大目的のうち、第二点目と第三点目に取り組むべく、2014年9月より「近代日本の日記文化と自己表象」と題した研究会を開催している。日記における自己の綴り方、あるいは綴らされ方を検討課題の中核に据えつつ、近代日本の書記文化と読書文化を学際的に考察する研究会である。幸いな事に、研究会は多様な参加者に恵まれた。関東近辺の諸大学にとどまらず、東北大学、奈良女子大学、京都大学、愛知学院大学、名古屋大学、同志社大学の教員と大学院生の参加も得られ、毎回約20名前後が集まるにぎやかな会となった。参加者の学問領域も、文学、教育学、歴史学、思想史学、社会学、文化人類学と様々である。現在（2015年1月）時点で計7回開催し、今後も二ヶ月の一度のペースで続けてゆく（本稿末尾に開催記録を掲載する）。事業の最終年度である2016年度には、研究会の成果としてシンポジウムの開催と、論文集の刊行を計画している。

〈多声響く内面の日記〉としての『忠愛寮日誌』

今回の報告では、研究会「近代日本の日記文化と自己表象」で取り上げた日記資料から、旧制第二高等学校の寄宿舎として設置された忠愛寮の日誌を紹介した。第二高等学校には、最大規模の明善寮を筆頭に、様々な寮が設置された。この中で忠愛寮は、「基督教徒及其主義を賛成する者」を入寮条件として、1895年に成立したキリスト教主義の寮である。戦時期は閉寮の圧力も蒙ったが、戦後、旧制高等学校が廃止される前年の1949年まで存続した。

忠愛寮の日誌（以下、「忠愛寮日誌」）が、大正期から昭和戦後期まで、確認できる限り17年分にわたって残されている。日誌には毎朝の礼拝の記録が記されるとともに、自己の煩悶や思索が率直に綴られる。のみならず、日誌の内容に他の寮生が異議を書き込み、紙面は論争の舞台の様相を呈することもあった。

一般的に言って、個人が綴る内面の日記は秘匿性が高く、複数人が綴る出来事の日誌は公共性が高い。これに対して忠愛寮日誌は、多くの寮生が交替で綴り、身近な読者を想定すべき公共性が自明でありながら、同時に個々の書き手が真摯に自己の内面を告白し、他者が応答する場である点で極めて興味深い。いわば忠愛寮日誌は〈多声響く内面の日記〉に他ならない。

報告では、礼拝の簡潔な記録として始まった寮日誌が、時を経るにつれ、書き手の煩悶や思索を

書き綴る場となったことを指摘した。更に太平洋戦争期の日誌を中心に、紙面上で展開された寮生同士の論争の内実を紹介ながら、戦時下における「真面目」と「不真面目」の天秤において、共感、批判、あるいは憤懣の力学がどう作動するかを検証した。

参考：「近代日本の日記文化と自己表象」研究会の活動記録

第1回（2014年9月20日）

「手書きの日記史料群は研究をいかに補い、掘り下げ、相対化するか—国際基督教大学アジア文化研究所蔵『近代日本の日記帳コレクション』を中心に—」（田中祐介、国文学研究資料館機関研究員）

第2回（2014年12月9日）

「「学徒兵の読書」の相対化にむけて—日記を使用した研究の一例として—」（中野綾子、早稲田大学大学院）

「〈学生〉たちの記録行為—戦後学生運動の現場から—」（道家真平、東京大学大学院）

第3回（2015年3月7日）

「個人の財産を社会の遺産に—「女性の日記から学ぶ会」の活動を通して—」（島利栄子、「女性の日記から学ぶ会」代表）

「農民日記をつづるといふこと—近代農村における日記行為の表象をめぐって—」（河内聡子、宮城学院女子大学非常勤講師）

第4回（2015年5月9日） 特集「近代日本のマス・リテラシー」

「教材としての日記：高等小中学校生徒の日記を手掛かりとして」（柿本真代、仁愛大学専任講師）
 「日常の実践としての「書くこと」：雑誌メディアにおける投稿記事を事例に」（大岡響子、東京大学大学院博士課程・国際基督教大学アジア文化研究所準研究員）

「多声響く〈内面の日記〉：戦時下の第二高等学校『忠愛寮日誌』にみるキリスト教主義学生の心情・信仰・炎上の論争」（田中祐介、明治学院大学助教）

「読書環境の拡大：戦場への書物流通と読み書きの実践」（中野綾子、日本学術振興会特別研究員PD・早稲田大学非常勤講師）

第5回（2015年7月19日） 特集：〈女学生〉の書記文化を再考する

「少年少女雑誌にみる作文と文体」（嵯峨景子、明治学院大学非常勤講師・国際日本文化研究センター共同研究員）

「奈良女子高等師範学校で「書く」こと 一大正大礼記念行事を例に一」（磯部敦、奈良女子大学准教授）

「多様な「女学生」の読み書きの実践を探る 一白河高等補習女学校生徒の日記帳と佐野高等実践女学校の校友会雑誌から一」（徳山倫子、京都大学大学院）

第6回（2015年9月19日）

「近代作家たちによる戦時下の王朝日記受容」（川勝麻里、明海大学ほか非常勤講師）

「歴史史料としての病床日誌——陸軍病院における事例を中心に」（中村江里、関東学院大学ほか非常勤講師）

第7回（2015年12月6日）

「銃後日記から「国民意識」をみるということ」（梅藤夕美子、京都大学大学院）

特別講演：「『五十嵐日記』を語る 戦後復興期の古書店文化と青春の日々」（五十嵐智、五十嵐書店店主）

植物の鉄栄養の研究 ～不良土壌の緑化を目指して～

野副 朋子

はじめに

鉄はすべての生物にとって必須な元素である。植物は土の中に存在する鉄を根から吸収して利用する。鉄は地殻中に約6%と豊富に存在するが、その大部分が水に溶けにくい難溶性三価鉄として存在する。特に世界の陸地の約30%を占める不良土壌である石灰質土壌では、土壌pHがアルカリ性のため、ほとんどの鉄が水に溶けていない。そのため、植物は深刻な鉄欠乏症状を呈し、収量は激減する。筆者らは植物の鉄欠乏耐性能力を向上し、不良土壌でも生育可能な植物の開発を目指して研究を行ってきた。本報告では、イネやトウモロコシなどの主要な穀類の属するイネ科植物が土壌中の難溶性三価鉄を獲得するために根から分泌するムギネ酸類の分泌機構について述べる。

ムギネ酸類とは

「ムギネ酸類 (mugineic acid family phytosiderophores; MAs)」は1976年、岩手大学名誉教授、高城成一博士により鉄欠乏オオムギの根から分泌される鉄溶解性物質として発見されたムギネ酸 (MA) とその類縁体の総称である。MAsはイネやトウモロコシなどの主要な穀類の属するイネ科植物特有の三価鉄キレーターである。イネ科植物は、土壌中の難溶性三価鉄を獲得するために、根からMAsを分泌する。根圏へと分泌されたMAsは、土壌中の難溶性の三価鉄をキレートして可溶化する。イネ科植物は、「三価鉄-MAs」錯体として鉄を根から吸収する。MAsは鉄だけでなく亜鉛や銅などの金属とも錯体を形成し、植物体内におけるこれら金属の輸送に関与している。また、MAs生合成経路の中間物質であるニコチアナミン (NA) は、イネ科植物だけでなくこれまで調べられた全ての植物において合成され、植物体内における金属の輸送に関与している。MAsの分泌量はオオムギ>コムギ・ライムギ>エンバク≫トウモロコシ≫ソルガム≫イネの順であり、経験的に知られてきたこれらの作物種の鉄欠乏耐性の強さの順序と一致している。つまり、MAsの合成量及び分泌量を向上できれば、植物の鉄欠乏耐性を増強できると期待される。MAsによるイネ科植物の鉄獲得機構の全容解明を目指して研究が行われてきた。

ムギネ酸類分泌トランスポーターTOM1の発見

ムギネ酸類の発見以降、イネ科植物の鉄獲得機構の全容解明を目指して精力的に研究が進められてきた。しかし、ムギネ酸類分泌の分子メカニズムは長い間未知のままであり、特にムギネ酸類分泌を担う膜輸送体はその単離・同定を目指して世界中の研究者がしのぎを削って研究を行ってきた。筆者はイネ科植物の鉄獲得に関わる主要な分子のうち最後まで未解明だったムギネ酸類分泌を担う膜輸送体の単離・同定に成功した (Nozoye et al. 2011; 野副ら2014)。鉄欠乏処理によりその発現が誘導される遺伝子群からムギネ酸類分泌膜輸送体候補遺伝子を4つに絞り込み、アフリカツメガエル卵母細胞において、¹⁴C-S-アデノシルメチオニンから合成した¹⁴C-デオキシムギネ酸 (DMA) およびその前駆物質¹⁴C-ニコチアナミン (NA) の分泌活性を調べた。4つの候補遺伝子のうち1

つが¹⁴C-DMA分泌活性を、2つが¹⁴C-NA分泌活性を示したことから、それぞれムギネ酸類分泌膜輸送体TOM1、ニコチアミン分泌膜輸送体ENA1、ENA2と名づけた。オオムギからTOM1相同性遺伝子 (*HvTOM1*) を単離し、その翻訳産物は¹⁴C-DMA分泌活性があることを示した。*TOM1*、*HvTOM1*の発現はいずれも鉄欠乏の根において強く誘導され、ムギネ酸類合成酵素遺伝子の発現 (Nozoye et al., 2004) と同様に日周変動を示した。*TOM1*過剰発現イネ、*TOM1*発現抑制イネを作出し、ムギネ酸類の分泌は*TOM1*の発現量と正の相関があることを明らかにした。また、ムギネ酸類を分泌できないトウモロコシ自然突然変異体*ys3*を解析し、トウモロコシ*TOM1*相同性遺伝子*ZmTOM1*の発現が*ys3*では野生型株に比べて激減していることを見出した (Nozoye et al. 2013)。*ys3*における*ZmTOM1*の転写産物にはイントロンや塩基の挿入が存在した。これにより*ZmTOM1*が*ys3*表現型の原因遺伝子であることが強く示唆された。ムギネ酸類の発見から35年、ついにムギネ酸類を用いた鉄獲得機構の役者が全て出揃った。

ムギネ酸顆粒の研究

ムギネ酸類分泌の行われる夜明け前の根細胞では粗面小胞体由来の顆粒が細胞膜近傍に蓄積している様子が観察される。そこで、ムギネ酸類はムギネ酸顆粒と名づけられたこの顆粒内で合成され、分泌されるまで顆粒内に蓄えられているという仮説が立てられた (Nozoye et al., 2004)。ムギネ酸顆粒は日の出前に細胞内小胞輸送システムにより細胞膜付近に移動し、その後一気に分泌されると推測されている。ムギネ酸類がムギネ酸顆粒で合成されているとすると、ムギネ酸類合成に関わる酵素はムギネ酸顆粒に局在すると考えられる。ムギネ酸類合成経路で働くNA合成酵素OsNAS2とsGFPの融合タンパク質は細胞内で活発に動く顆粒に局在することを明らかにした (Nozoye et al. 2014a,b)。ムギネ酸類はこれらの顆粒で生合成されると考えられる。NA合成酵素に保存されている二つの細胞内小胞輸送配列に変異を導入した実験から、OsNAS2の顆粒への局在、及び顆粒の動きがムギネ酸類の合成量及び分泌量に関与していることを見出した。

NAを高蓄積するダイズの創製

ダイズ種子はしょうゆの原料であるが、しょうゆに血圧降下作用があり、その機能物質がダイズ種子中に含まれるNAであることが報告された。ダイズ種子のNA含量は高く、イネなどの他の作物に比べて10倍ものNAが含まれている。このNA含量をさらに高めることができれば高血圧予防に有効なダイズが作出できる。筆者はダイズのNA合成酵素遺伝子の発現を高め、NA含量の高いダイズの作出を目指した。アグロバクテリウムを用いたダイズの形質転換技術はその効率の低さから一般的に普及していない。そんな中、アメリカミネソタ大学のポーラ・オルファット博士が形質転換効率を16%まで高める方法を開発したという論文を発表した (Olhott et al., 2002)。筆者はポーラ博士からダイズの形質転換を習得するべく、2006年の6月にミネソタ大学に滞在した。ミネソタ大学

での滞在期間は約2週間と短かったため、感染法をメインに習い、その後の過程はポーラ博士が行っている形質転換の様々なステージを見させてもらうという料理番組のような習い方だった。楽しいアメリカ滞在を終え帰国した筆者は、ダイズの形質転換を開始した。日本で行ってみると、アメリカで習ったのと同じように行っても、アメリカで習ったようにはうまくいかず、色々な条件検討をしながら悪戦苦闘する日々が続いた。形質転換開始から7年目、ようやくオオムギのNA合成酵素遺伝子*HvNAS1*を高発現する形質転換ダイズを得ることができた。*HvNAS1*過剰発現ダイズは、種子中のNA含量が非形質転換ダイズの約4倍の768.1 $\mu\text{g/g DW}$ に高まった。種子中の鉄・亜鉛含量も非形質転換の約2倍に増加した。また、*HvNAS1*過剰発現ダイズは石灰質土壌における鉄欠乏に耐性を示した (Nozoye et al., 2014c)。

おわりに

筆者は本年度、明治学院大学に着任した。明治学院大学は文系大学であるため研究設備が十分であるとはいえずどのように研究を継続していくか模索している。ただ近年のバイオテクノロジーの発展は目覚ましく、文系大学の学生といえども生物学・生命科学に関する知識を身に付ける必要があると考える。本報告で述べたTOM1やENA1に似た仲間、TOM・ENAファミリーが植物には存在しており、それぞれ重要な働きを担っていると考えられる。筆者は現在TOM・ENAファミリーの解析を進めており、TOMファミリーの一つであるTOM2が植物体内の金属輸送に関与し、植物の生育に必須であることを見出した (Nozoye et al., 2015)。これからも自らが最先端の研究を行い、その知識を学生に還元していけるようにしたい。今年度は様々な受賞を受けることができた。また私生活では子どもが誕生した。出産に際いては様々な方々に温かいご支援を賜った。これらの受賞やご助力を糧にして少しでも役に立つ研究を展開していけるように精進していきたい。

参考文献

- 野副朋子, 中西啓仁, 西澤直子2014「ムギネ酸トランスポーターの発見」、化学と生物、vol.52、No.1 p15～22
- Nozoye, T., Tsunoda, K., Nagasaka, S., Bashir, K., Takahashi, M., Kobayashi, T., Nakanishi, H. and Nishizawa, N.K., 2014a. Rice nicotianamine synthase localizes to particular vesicles for proper function. *Plant Signal Behav.* 4, 9.
- Nozoye, T., Nagasaka, S., Bashir, K., Takahashi, M., Kobayashi, T., Nakanishi, H. and Nishizawa, N.K., 2014b. Nicotianamine synthase 2 localizes to the vesicles of iron-deficient rice roots, and its mutation in the YXX ϕ or LL motif causes the disruption of vesicle formation or movement in rice. *Plant J.* 77, 246-260.
- Nozoye, T., Kim, S., Kakei, Y., Takahash, M., Nakanishi, H. and Nishizawa, N.K., 2014c. Enhanced

levels of nicotianamine promote iron accumulation and tolerance to calcareous soil in soybean. *Bioscience Biotechnology Biochemistry*. **22**, 1-8.

Nozoye, T., Nakanishi, H. and Nishizawa, N.K., 2013. Characterizing the crucial components of iron homeostasis in the maize mutants *ys1* and *ys3*. *PLoS One*. **8**, e62567.

Nozoye, T., Nagasaka, S., Kobayashi, T., Takahashi, M., Sato, Y., Uozumi, N. and Nishizawa, N.K., 2011. Phytosiderophore efflux transporters are crucial for iron acquisition in graminaceous plants. *J. Biol. Chem.*, **18**, 5546-5554. (* :equal contribution)

Nozoye, T., Itai, R.N., Nagasaka, S., Takahashi, M., Nakanishi, H., Mori, S. and Nishizawa, N.K., 2004. Diurnal changes in the expression of genes that participate in phytosiderophore synthesis in rice. *Soil Sci. Plant Nutr.*, **50**, 1125-1131.

本年度の業績

受賞

第33回日本土壌肥料学会奨励賞 「ムギネ酸類分泌の分子機構に関する研究」

平成27年度（第14回）日本農学進歩賞 「ムギネ酸類分泌の分子機構に関する研究」

(公財)浦上食品・食文化振興財団 財団設立30周年記念研究助成（研究室立上支援）「植物工場における作物の品質向上を目指した、ムギネ酸類・ニコチアナミン分泌を介した鉄移行と鉄恒常性維持の分子メカニズムの解明」

科研費若手研究（B）「ムギネ酸類・ニコチアナミン分泌を介した鉄移行と鉄恒常性維持の分子メカニズムの解明」

論文

Nozoye, T., Nagasaka, S., Kobayashi, T., Sato, Y., Uozumi, N., Nakanishi, H. and Nishizawa, N.K., 2015. The Phytosiderophore Efflux Transporter TOM2 Is Involved in Metal Transport in Rice. *J Biol Chem*. **290**, 27688-27699.

プレスリリース：植物の生育に必要な金属輸送に関与するタンパク質の発見TOM2は植物体内の金属輸送を担う：<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/utokyo-research/research-news/identification-of-a-crucial-metal-transporter-for-plant-growth.html>

Identification of a crucial metal transporter for plant growth TOM2 involved in metal translocation within plants:<http://www.u-tokyo.ac.jp/en/utokyo-research/research-news/identification-of-a-crucial-metal-transporter-for-plant-growth.html>

コミュニケーション能力の向上を図る授業づくり —留学生を招く交流型学習の試み—

洪潔清

1 背景と目的

グローバル化が進む21世紀において、外国語教育は高度な語学力を持ち、且つ多面的な異文化に対応できる人材を育成することが求められている。このようなニーズに応じるため、大学における第二外国語教育においては、主に二つの点の向上と改善が必要とされる。一つは、学習者が自らの意思を異文化を持つ人に正確に伝えられるコミュニケーション能力であり、もう一つは、学習者の積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢である。

一方、実際の教育現場においては、各大学が、クラスの規模が大き、学習時間数が少ない、学習者の学習意欲が低下しているなどといった共通した問題を抱えている。これらの問題をいかにして改善していくかが、上記二点の向上を図る上で大きな課題となっている。

筆者は、こうした課題の克服や学習者のコミュニケーション能力の向上を図るため、中国人留学生との共同学習の取り組みに着目し、身近にいる留学生を授業に招き、ネイティブスピーカーと学習者が直接交流することを通じて、実践的コミュニケーション能力の向上と能動的な学習態度の涵養を図る授業づくりを試みた。

本研究報告では2012年度千葉大学で行われた交流型学習の教育実践を取り上げ、その授業設計、交流内容及び学習効果などを紹介した。さらに今後の研究課題として、本学でのランゲージアシスタント (LA) の活用方法について検討した。

2 交流型学習の授業づくり

交流型学習の授業づくりを、全学向けの週一回開講される中国語中級クラスで実施した。授業設計にあたっては、まず学習者の語学力によって下記の3つのレベルに分けて、それぞれ言語習得と文化理解における到達目標を設定した。

	対象	言語習得の到達目標	文化理解の到達目標
レベル1	・1年間履修 ・中国渡航歴なし	簡単な中国語で質疑応答ができる	教科書に記載のある文化事象を観察して理解できる
レベル2	・1～2年間履修 ・短期留学、滞在者	テーマについて自らの考えも含めて中国語で表現できる	文化事象について、日中間の共通点と相違点に気づき、伝えられる
レベル3	・中国人2世 ・長期留学、滞在者	テーマについて流暢な中国語で留学生と交流することができる	文化事象について、日中間の共通点と相違点を留学生と討論することができる

次に教科書の内容に合わせて、語学力の向上と文化への理解を深めるために、留学生との交流会(1回45分間)を一学期に4回ずつ実施することにした。交流の内容は主に作文の発表と質疑応答であった。

具体的には、レベルによりグループ分けをし、留学生1人に対して、学習者3～5人を一つのグ

ループとした。学習者は決められたテーマについて事前に作文を作成し、それを発表し、作文の内容について、留学生からの質疑に応答をし、また留学生の発表を聞いて、それについて質問をするなどの交流活動を行った。授業後、学習者に交流会の内容に対する理解度や、勉強になった点及び最も難しかった点について自由に記述させた。

学習者の記述した内容から、レベル1と2の学習者は、まずリスニングという大きな壁にぶつかっていたこと、またどのレベルの学習者も語彙の不足が存在していることが分かった。さらに自分の語学力に自信を持っていないことから、緊張や不安を抱え、円滑な交流を妨げていることも多く見られた。

このように、リスニング力が弱い、語彙が足りない、話すことに自信がないといった問題を解決するために、①新たに事前準備指導会を設け、留学生にも参加してもらい、作文の音読練習や発音矯正について徹底した指導を行った。②語彙を増やすために、テーマに関する語彙を予想してまとめておき、事前に学習させ、心理的負担を少なくした。③即興で質問するのは難易度が高いため、事前準備指導会で「自己評価シート」にテーマに関する質問を書き込んでもらい、交流の際に指示に従って、自己評価を作ってもらおうことを試みた。

「自己評価シート」を使用することにより、交流の際何を聞けばいいか、どのように話せばいいかすべて準備しているため、失敗を恐れる人も、不安を抱える人も自信を持って参加できるようになった。また、用意されたテーマについてどれくらい質問したのか、どの程度聞き取れたのかを「自己評価シート」に記入して提出しなければならないため、学生たちはみんな真剣に取り組んでいた。このような方法はある程度強制的ではあるが、円滑な会話を促進するには大きな効果があったと見られる。学生たちも多くの会話ができて効果的だったと評価している。

期末に、学習者24人を対象にアンケート調査を行った。その結果、75%の学習者が「とてもためになった」、21%の学習者が「少しためになった」と回答した。この結果から、交流型授業づくりが学習者に大いに評価されていることが窺える。また、交流会を通して「勉強になったこと」「難しかったこと」について、自由記述の内容に基づいて分類した項目を選択してもらったところ、「自らの不足している箇所が明確になり、さらに勉強する意欲が湧いた」ことが一番に選ばれる結果となった。つまり、こうした交流型学習の授業づくりが学習意欲の向上にも大きく役立っていることを示している。

3 交流型学習の学習効果

3.1 語学の実践練習に効果的である。

中国人2世を除き、学生の多くは日頃中国人と接触する機会がないため、習った中国語を実際にどの場面で、どのように使うか実践した経験がない。交流会で、中国人留学生を相手に実践の経験を積むことにより、教科書で習った言語知識を使い、定着させることができた。また、さまざまな会話の中から教科書だけでは得られない新しい知識も身につけられ、中国文化や社会事情に対する

理解を深められただけでなく、中国への関心もさらに強めることができた。

3.2 学生に話す自信をつけることができる。

交流の際、自分の語学力に自信を持たず、話したいことをどう表現するか戸惑う学生が多く見られる。しかし、あまり自信のなかった表現であっても相手に通じれば、喜びと達成感があり、それが成功体験として蓄積され、学生にとっては自信となる。それはまた、学生に積極的に話すことの大切さを再認識させ、チャレンジする意欲を向上させることにも繋がるであろう。

3.3 弱点克服に向けて頑張る意欲が湧く。

交流会に参加した学生のアンケートには「発音を通じなかった」、「習った単語なのに、音声として聞くと聞き取れない」、「語彙が足りなくて、相手の話が理解できない」といった感想が多く見られる。このように、交流活動を通じ、多くの学生は自分の発音、語彙、リスニング力と表現力における弱点に気づくことができたようである。中には、「発音を注意されて、自分の発音を意識するようになった」、「語彙不足を感じた。単語の勉強にもなるので、次回は80%以上聞きとれるように頑張る」などといった積極的な姿勢も見られ、交流会は学生に弱点克服に向けて頑張る意欲を向上させる効果があったと言えるだろう。

4 今後の課題

4.1 到達目標を明確にする

授業設計には到達目標が設定されているが、どの程度まで到達したか、その到達目標を測る基準と方法も明確にする必要があると思われる。例えば、初回の授業、前期期末と後期期末の3回、リスニングテスト、個別インタビューまたはプレゼンテーションなどを行い、学生のレベルをチェックしながら、到達目標を確認することが方法の一つである。

4.2 LAの活用方法

本学でも中国人留学生（ランゲージアシスタント）が中国語の授業に参加している。現段階ではまだ発音の矯正や音読の練習のサポートをしているが、今後は、LAを活用して、初級クラスも中級クラスも上記のような交流型学習の授業づくりを計画してみたい。

李樹廷と日本キリスト教との関係

徐正敏

朝鮮のキリスト者として一翼を担った人物がまさに李樹廷である。李樹廷のキリスト教受容は、朝鮮プロテスタント史において知識人階層の受容においてその中心軸を成す。ここでよく比較されるのが、満洲でのキリスト教の受容過程である。すなわち、徐相輪^{ソ・サンユン}など『ロース訳聖書』の翻訳者によるキリスト教受容のルートが「民衆階層における受容」という特性を持っていることとは異なり、日本を拠点とした李樹廷などのキリスト教受容過程は、「両班・知識人における受容」という特性を持っている。このように、李樹廷は朝鮮プロテスタント史において最初の知識人キリスト者の代表格である。今まで彼に関する研究は、その生涯や活動、アメリカ宣教師による朝鮮宣教着手を勧告する宣教師誘致のための努力、そして特別な業績として聖書翻訳に関するテーマを中心に行われて来た。これらの研究は、朝鮮キリスト教受容史における李樹廷の立場を忠実にまとめ上げるテーマである。

本発表では、李樹廷のプロテスタント受容活動の土台、すなわち「コンテクスト」(context)になる当時の日本、日本キリスト教、そして李樹廷と関わった日本の助力者たちを中心に考察する。これは、朝鮮キリスト教受容史において日本が持っていた役割を一つの重要な関係軸として、どのような意義を持つのかを明らかにする作業になると考える。

朝鮮後期の1876年以降、朝鮮は日本と修交し何度か「修信使」を日本に派遣した。1881年4月には「紳士遊覧団」が渡日し、その団員の一人である孫鵬九^{ソン・ブング}は日本に残って東京外国語学校の朝鮮語教師として勤めた。「紳士遊覧団」の他のメンバー安宗洙^{アン・ソンス}は近代的な農業問題に関心を持ち、著名なキリスト者農学者であった津田仙に出会った。この二人の活動が李樹廷の渡日と日本での活動に直接的なモチベーションを与え、先行活動として大きな意義を持っている。近代農法を師事した安宗洙は、キリスト教を接する機会も同時に得ていた。その後、李樹廷は安宗洙が津田仙に会うことを願い、孫鵬九の後任として東京外国語学校の朝鮮語教師として活動した。李の渡日において、最も直接的な関係があったことは確かである。ついに李は、1882年9月の「壬午軍乱」が鎮まった後、開化政権が派遣した朴泳孝を代表とする修信使節の一員となり日本に渡った。李樹廷が朴泳孝の使節団に参加し、その後日本にとどまり近代文物に接触、学習する機会を得たのは、「壬午軍乱」当時危険にさらされた王妃(明成皇后)を救った功勞によるという記録と、彼の渡日、洗礼までの過程を記した史料が日本にも伝えられている。これを大部分の研究者が活用して来た。すなわち、1883年5月11日に発行された雑誌『七一雑報』第8冊19号(第3面)の内容である。この記録を現在まで李樹廷研究者がそのまま引用し、参考にして李の渡日経緯と日本でのキリスト教への入信、洗礼までの過程を研究してきた。

一方、李のキリスト教改宗以後、日本での彼の活動の中で最も比重があり重要な業績は聖書翻訳作業である。また、李は孫鵬九に続き、1883年8月から2年の任期で東京外国語学校の教師を務めた。この職場のおかげで、李は日本で安定した生活を享受し活動することができた。さらに、彼はアメリカのキリスト教界に朝鮮への宣教を請願する書簡を送り、これが宣教雑誌に載せられること

で朝鮮への宣教師派遣を触発した面でも大きな貢献を果たした。李のこの文章を、朝鮮に派遣された初期のアメリカ人宣教師たちは読んだに違いない。1885年、朝鮮に到着した最初のプロテスタント宣教師であるアンダーウッド (H. G. Underwood)、アベンゼラー (H. G. Appenzeller) などが朝鮮に渡る途中、日本に寄って李に出会い、朝鮮宣教に関するオリエンテーションを受け、彼が翻訳した『マルコによる福音書』を持って朝鮮に入ったということが定説になっている。

そして李は、在日期间中に東京外国語学校の教科書、学習教科書を含めて漢文小説『金鰲新話』の日本復刊に参加するなど聖書以外の著作活動においても功績を残した。1882年9月から李は約4年間日本に滞在した。帰国後の彼の動向は明かになっていない。これも今後の研究課題としてあげておかなければならないだろう。

李樹廷は、朝鮮のキリスト者であるのみならず、日韓キリスト教関係史における最初の人物である。また、彼は朝鮮におけるカトリック、プロテスタント両者のアイデンティティを持った人物でもある。また、アメリカの宣教師による朝鮮宣教の開始を導き、初代宣教師の来韓に関与することで韓米キリスト教の仲介者としての役割も担った。結局、李は互いに異なる主体との関係を成立させる使命を果たしたのだ。

本発表は、特に李樹廷と日本のキリスト教との関係、さらには日韓キリスト教の初期関係史の観点に留意した。もちろんこの時期の朝鮮キリスト教の実体は存在しなかったが、李樹廷時代の日韓キリスト教の関係は肯定的なものから出発した。日本の初期のキリスト者たちは李樹廷を一人の実例と考えながら、自分たちにとっての宣教者として、さらに根本的にはキリスト者としての使命を見つけたと言える。しかし李樹廷時代、まさにその直後から日韓の間には歴史的に不幸な関係が始まり、日韓キリスト教関係史も暗黒期に入っていった。日本のキリスト教は、結局長い間、日本帝国主義の朝鮮侵略において先頭に立つ役割を果たしたのである。すなわち、国家に隷属したキリスト教として、総体的に国家目標を優先視する屈辱的なキリスト教会の特性を見せた。

しかし解放以後、一定の期間が経ち、日本のキリスト教は新しい覚醒時代に入った。特に、1967年「日本キリスト教団」議長名義で発表された「第2次世界大戦中の戦争責任告白」以後、その動向は確実に変わった。これを基点として日本のキリスト教は、日本社会で苦しんでいる少数者へ関心を示しつつ実践したが、その最初の対象者が差別を受ける「在日コリアン」であった。そして、その後、朝鮮の進歩的なキリスト教が民主化運動と統一運動に力を傾けた時代に、日本のキリスト教は新しい日韓キリスト教関係史を形成し始めた。朝鮮のキリスト教における正義を求める闘いに犠牲的な協力を惜しまず、あらゆる手段で献身した。この時期、日韓キリスト教関係史において歴史上第二、第三の李樹廷が登場し、彼らはまた日本のキリスト者の協力と同志として友愛を築きつつ自分たちの時代的使命を果たしていった。また、李樹廷時代には、彼が日本のキリスト者たちと日本駐在宣教師の窓口として、アメリカの教会に朝鮮宣教を要求したように、民主化、統一運動時代の朝鮮のキリスト者たちは、日本のキリスト教を窓口にして世界教会に向けて朝鮮のキリスト教

の良き目標に対する理解と援助を求めることができた。

李樹廷時代には、肯定的な関係史により歴史の開始を見せた日韓キリスト教は、長年の桎梏の時代を経て、また新しい時代に第二、第三の李樹廷と共に新しい日韓キリスト教関係史を樹立して来た。このような観点から李樹廷と日本のキリスト教、日本の初期キリスト者との関係を考察することが最も有効な観点の一つと考える。

参考文献

- 『七一雑報』、1881年11月25日。
 『七一雑報』、1883年5月11日。
 『七一雑報』、1883年6月1日。
 「天主教朝鮮に入事実」、『福音新報』（関西）、第1冊第7号、1883年8月14日。
 小川圭治・池明観、『日韓キリスト教関係史資料』（1876-1922）、新教出版社、1984
 『東京外国語学校沿革』、1932。
 “Rijuteis Appeal for Missionaries, Yokohama Dec. 13, 1883,” *The Missionary Review*, vol. VII, 1884
 吳允台、『朝鮮基督教史IV-改新教傳來史 先驅者李樹廷編』、恵宣文化社、1983。
 任展慧、「李樹廷の活動」、『日本における朝鮮人の文学の歴史』、法政大学出版局、1984。
 李光麟、「李樹廷의 人物과 그 活動」、『史学研究』、朝鮮史学会、1986年9月。
 金태준、「李樹廷、同胞의 靈魂의 救濟를 위한 念願」、『翰林日本学』第2巻、翰林大学校日本学研究所、1997。
 金秉喆、“李樹廷 譯刊의 「신약마가전복음서언해」 研究、”『象隱趙容郁博士頌壽紀念論叢』、1971。
 金成恩、『宣教と翻訳-漢字圏・キリスト教・日韓の近代』（東京：東京大出版会、2013）。

研究業績

徐正敏

{著書}

- 『韓国カトリック史概論—その対立と克服』、かんよう出版、2015
 『親日と抗日を越えて—日韓キリスト教史から学ぶ新たなパートナーシップ』、日本聖公会、2015
 『信仰の痕跡—日本の関東と関西を中心に』（共著、ハングル）、韓国キリスト教歴史研究所、2015

{論文}

- 「戦前、戦後韓国教会の受難」（ハングル）『神学と教会』、ヘアム神学研究所、2015. 6
 「李樹廷と日本キリスト教」（ハングル）『韓国キリスト教と歴史』、韓国キリスト教歴史研究所、2015. 9

「1945年前後韓国キリスト教の受難—信仰と良心の圧制に対する抵抗、屈折と懺悔の問題」、明治学院大学キリスト教研究所紀要、2016年2月掲載予定

「李樹廷と日本キリスト教との関係」『カルチュラル』明治学院大学教養教育センター紀要、2016年3月掲載予定

{学会発表}

「李樹廷と日本キリスト教との関係」李樹廷の「マルコによる福音書」出版130周年記念国際学術シンポジウム、東京、2015. 6. 30

「キリスト教と戦後70年—韓国キリスト教との関係と比較—」日本基督教学会第63回学術大会シンポジウム、東京、2015. 9. 15

「1940年代日本キリスト教とファシズム国家体制との関係研究—アメリカ・メソジスト教会の現地報告と状況認識を中心に—」キリスト教史学会第66回大会、東京、2015. 9. 18

「ファシズム絶頂の時代における日本キリスト教に対するアメリカ側の認識」アジアキリスト教史学会第8回学術大会、ソウル、2015. 10. 31

天龍寺造営に関する一考察

モリー・ヴァラー

夢窓疎石（1275～1351）は、鎌倉時代から室町時代にかけて、乱世に活躍した臨済宗の禅僧として知られている。夢窓疎石は、北条家、後醍醐天皇、足利尊氏、足利直義など、皇族や武家とも親密な関係を持ち、五山の制度の形成にも大きく貢献した。また、彼は多種多様な著書を残し、中世文化に大きな影響を与えている。そこで、報告者は、現在、仏教史学、庭園史学、文学などのアプローチを用いながら、夢窓の作品とその思想に関する研究を行っている。本報告では、夢窓が開山した天龍寺について紹介する。

天龍寺は後醍醐天皇（1288～1339）の菩提を弔うため、光厳院（1313～1364）の勅令を受け、足利幕府によって創建された。大陸に派遣された天龍寺船の存在はあまりにも有名であろう。未完成のまま1342年に京都五山の第二位に位置付けられ、1345年に落成された。

また、この天龍寺には、乱世における夢窓の微妙な立場も反映されていると考えられる。夢窓は鎌倉末期に、北条政権最後の有力者の庇護を受けたのち、北条家の対抗勢力である後醍醐天皇の後援を受けた。足利尊氏によって後醍醐天皇の建武の新政（1334～1336）が崩壊すると、夢窓は北朝や足利幕府の手厚い保護を受け、光厳院、光明天皇（1321～1380）、足利尊氏、足利直義の帰依を受けた。

夢窓の見た天龍寺は、様々な意義があったと考えられ、その全体的な意義を明らかにする必要があるだろう。

参考文献

- 小島毅監修、鳥尾新編『東アジアの海域に漕ぎ出す4 東アジアのなかの五山文化』東京大学出版会、2014年。
- 菅基久子「護国と清浄—天龍寺創建と夢窓疎石」『国家と宗教：日本思想史論集』思文閣、1992年。
- 禅文化研究所編『夢窓国師語録』大本山天龍寺僧堂、1989年。
- 玉懸博之「夢窓疎石と初期室町政権」『日本中世思想史研究』ペリカン社、1998年。
- 玉村竹二『夢窓国師 中世禅林主流の系譜』平楽寺書店、1958年。
- 辻善之助『仏教史』第4巻、中世編之3、1949年。
- 奈良本辰也編『天龍寺』東洋文化社、1978年。
- 西山美香『武家政権と禅宗：夢窓疎石を中心に』笠間書院、2004年。
- 西山美香「天龍寺供養の史的意義をめぐって」『禅文化研究所紀要』28号、2006年。
- 原田正俊『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館、1998年。
- 原田正俊編『天龍寺文書の研究』思文閣、2011年。
- 八木聖弥「室町初期の怨霊思想：天龍寺創建をめぐって」『文化史学』49号、1993年。
- 柳田聖山『夢窓：日本の禅語録』講談社、1977年。
- Collcutt, Martin. "Musō Soseki." In *The Origins of Japan's Medieval World*. Edited by Jeffrey P. Mass,

261–294. Stanford: Stanford University Press, 1997.

Goble, Andrew. “Visions of an Emperor.” In *The Origins of Japan’s Medieval World*. Edited by Jeffrey P. Mass, 113–137. Stanford: Stanford University Press, 1997.

03

ランゲージラウンジ
活動報告

03

2015年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージ・ラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、学習者自らが具体的な目的を設定し、その目的に向かって定期的にチューターと面談しながら学習するプログラムを展開し、自律学習実践の手助けを行っている。

英語以外の外国語では、言語ごとに曜日、時限を決めてネイティブスピーカーの会話実践の場、オンライン学習の学習補助の場を提供したり、日頃の学習の補足を行ったりしている。

以上のように、現在、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮しておこなっている。次年度については、留学生との交流の場などを増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：高桑光徳

英語部門では、昨年度に引き続き、英語の自律学習を1学期間にわたってサポートするIndependent Language Study Support Program (ILSSP) と、昼休みに英語による学術的な講義を聴講するLuncheon Lecture Seriesを主要な活動の基軸として実施した。

まず、毎年度、参加した学生から高い評価を得てきたILSSPは、今年度も春学期と秋学期の2期にわたり実施した。毎週月曜日の11:00-15:30をコーディネーターの山森由美子氏（本学非常勤講師）が担当し、毎週木曜日の11:00-15:30をコーディネーターの坂井誠氏（本学非常勤講師）が担当した。各学生が設定した学習目標を達成すべく、ポートフォリオを活用して自律学習に励むことができるように学習支援を行った。学生の選抜方法は、従来通りオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。採用予定人数を大幅に超える多くの応募があったことから、登録希望者に英語学習に対する熱意を調査用紙に記入してもらい、その内容を勘案した上で選抜した。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

表1 ILSSP実績

実施期間	参加者数
春学期（5月-7月）	24名 [文学部5、経済学部4、社会学部1、法学部5、国際学部9]
秋学期（10月-1月）	24名 [文学部7、経済学部3、社会学部3、法学部3、国際学部6、心理学部2]

2015年度もLuncheon Lecture Seriesを春学期2回、秋学期3回の計5回開催した。テーマはバラエティに富んでおり、本学非常勤講師が英語によるレクチャーを行った。考古学の実情やあまり知

られていない日系カナダ人の歴史、英語の勉強法などの様々なトピックがあり、非常に充実したシリーズになった。パワーポイントやビデオを活用したレクチャーが多く、楽しみながら、英語のレクチャーに耳を傾ける機会を学生に与えることができた。来年度も学生の興味をひくような幅広いテーマによるLuncheon Lecture Seriesを予定している。

表2 2015年度Luncheon Lecture Series実績

	日付	タイトル	講演者	参加者数
第1回	5/28	Leaving Mr. Jones Behind: A Brief Introduction to Real-life Archaeology	Dax Thomas (本学非常勤講師)	111名
第2回	6/9	Wolf: Endangered & Still Vilified	Trazi Williams (本学非常勤講師)	156名
第3回	10/28	Japanese Canadians: Their History and Education	Aya Iino (本学非常勤講師)	75名
第4回	11/9	Funny English in Japan: Are You Sure Your English is OK?	Makoto Sakai (本学非常勤講師)	53名
第5回	12/4	Literature as Performance: Why Are You Reading This?	Patricia Yarrow (本学非常勤講師)	60名

2.2 ドイツ語部門：吉田真（経済学部）

2015年度ランゲージラウンジ(ドイツ語部門)は「ドイツ語 de ランチ」と題して、森本康裕氏(本学非常勤講師)が毎週金曜日の昼休みに行なった。毎定期的に参加する学生の人数は年間を通して3～5名程度であった。参加者は大半がドイツ語初級を履修している1年生の学生だったが、ドイツ語を履修していない学生も数名参加していた。

教材として『独検過去問題集』(郁文堂刊)を利用し、ドイツ語リスニングとならんで重要なフレーズや単語の確認、すでに授業内で学んだ文法事項の簡単なおさらい、典型的なドイツ語の言い回しなどを学習した。また、現代ドイツを舞台とした映画を鑑賞し、参加者の間で意見を交換しあった。本講座では春秋両学期を通じ、授業時に学んだ基本的なドイツ語文法の復習やその応用のための機会を提供すること、参加者がドイツ語やドイツ文化に親しみをもってもらえるように努めること、そして参加者のドイツ語学習へのモチベーションを高めることを目標とした。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、ランゲージ・ラウンジのスペースの利用、時間帯等を考慮して、自律的な学習をより効果的に行える「オンラインコース」：スペイン文化センターが開設しているAVE (Aula Virtual de Español) への受講によって自律学習を促している。春学期、秋学期に10名程度受講した。

今回初めての試みとして、スカイプ授業との併用を行い、ネイティブスピーカーの講師との会話によって、学習のモチベーションアップにつながった。次年度はこの講座をどのように利用するか
の検討が必要と言える。

この講座では、予め様々な学習教材が用意され、学習者が自由にページにアクセスして学習する
方法になっている。今後は、スカイプ授業の導入をどうするか、またこの学習を実際のコミュニケー
ションの場に結び付けていくか、ランゲージ・ラウンジの他の活動とどのように有機的に結び付け
ていくかなどの工夫が必要だと思われる。

2.4 中国語部門：洪潔清

2015年度の中国語部門「中文会話倶楽部」は、昨年度と同様に、毎週木曜日の昼休みに横浜校舎
1号館138教室で行なった。留学生を中心に担当してもらい、春学期と秋学期それぞれ13回ずつ開
催した。参加者は平均して16名あった。多い時には20名以上にも上り、教室を埋め尽くすほどの人
数で、大変賑わっていた。参加者の多くは4月から中国語を履修した1年生であるが、そのほかに、
協定校から来る交換留学生や中国での留学を経験した学生、全く中国語を履修していない学生まで
もが参加していた。

活動の内容については、従来通り、授業内容の補習や相談、実践的な会話の練習などが行われた。
それ以外に、今年度は新たに留学生による現代中国事情や中国文化の紹介を加えた。その背景には
中国語を勉強し始めたばかりの学生にリアルな現代中国を知ってもらい、中国に対する関心を持っ
てもらいたいとの意図があったからである。実施手順としては、まず担当者同士が相談してテーマ
を決め、映像とパワーポイントを使って説明をした。具体的な内容として、①語学関係については、
挨拶表現、家族呼称の言い方、日中同型四字熟語と日中擬音語などを、②文化については、歌や故
郷、食文化、少数民族と漢民族の衣装、日本と中国との干支の関係、中国の旧正月春節などを紹介
した。さらに、中国の若者の間で流行していることや新しいネット用語など、現代中国のトレンド
なども同世代の日本人学生と共有した。

こうして短い50分間に、参加者たちが歌ったり、新しい言葉の発音を練習したり、日中文化につ
いて話し合ったりして、楽しい一時を過ごすことができたようだ。ある日本人学生は、「中文会話
倶楽部で、中国についての知識が深められ、留学生と交流することで、中国語の授業の内容が身近
に感じられるようになった。」と感想を語っていた。また、ある中国人留学生は、「日本人学生に紹
介しようとすることで自国文化を再発見することができ、さらに、それを日本語でプレゼンテーショ
ンをする事自体、自分にとって非常に良い日本語の練習機会であり、次年度もさらに頑張ってい
きたい。」と抱負を語っていた。

一方、倶楽部の課外活動の1つとして、今年10月に神奈川県日本中国友好協会が主催した「第33
回全日本中国語スピーチコンテスト神奈川大会」を学生に紹介し、朗読発表会に3人の1年生が参

加した。中国語知識ゼロから始まって4ヶ月しか経っていない学生にとって、参加すること自体が大きなチャレンジだったと思われる。倶楽部の活動時間内に留学生が一对一で丁寧に発音の指導を行ない、またリハーサルにおいても、指摘されたところのさらなる習得にも努めた。残念ながら、優勝にこそならなかったものの、参加者全員は、朗読発表会が今後の中国語学習に非常に有意義であったと感じたようだ。上級者のスピーチを多く聴くことで、表現方法の広がりを感じることができ、スピーチで使われた単語が中国語の授業中に出てくるとすぐに反応ができるようになったと実感したようだ。朗読会を通じて自分の弱点に気づき、何事も1つのことを会得するには、向上心をもって不断の努力を怠らないことが重要だと痛感したようだ。

さらに、今年はまだ一つの課外活動として、日中科学技術文化センターが主催した「日中青年友好交流訪中団」に、3人の学生を推薦した。彼らは、中文会話倶楽部にも頻りに参加し、特に積極的に中国語を勉強しようとする学生である。今回の訪中団は、中国のありのままの姿に触れ、日中関係の相互理解を若い世代から深めていこうというコンセプトのもとで企画され、12月23日～29日に上海と江蘇省を訪れ、現地の大学生との交流、現地の日系企業への訪問、中国の文化・歴史・自然などの参観など幅広い活動を展開した。帰国後、参加した3人は、今年度最後の中文会話倶楽部の活動時間に自分の訪中体験を報告し、倶楽部に参加した学生達と共有した。

日中関係の政治的なすれ違いがマスコミに取り沙汰されている昨今、今回の訪中団に参加することにより、自分の目で観察し、自分の体で感じるさまざまな体験が参加者にとっては、非常に貴重な経験であった。とりわけ、日本では、中国本土の大学生との触れ合いは、あまり体験できないことで、交流会で、日中文化の相違点について理解・共感し、且つ中国人学生とおおいに交流を深めたことは日本人学生にとって大きな収穫の1つであることがアンケートの記述から読み取れた。

具体的に、3人の学生はそれぞれ訪中の感想を以下のように語った。訪中前に、「中国人は、無愛想で怖い」という印象を持っていたMさんは、現地で、優しく対応し、或いは日中関係を良好にしようとする多くの人々と接して、「自分も自然に笑顔になり、ありのままで話すことができた。訪中前と全く違う印象を持つことになった。」と感想を語った。自分の語学力の拙さを痛感したYさんは、「次回中国に行く時、少しでも話せるようになるよう、これからも中国語の勉強を続けたい。」と強い意気込みを語った。何度か中国に訪れたことがあるHさんは、中国の発展が想像以上のテンポで進んでいると思いながらも、インフラの整備など、まだまだ成長する余地があることや、人々のモラルにも未成熟な部分があることに気付くことができた。

総じて言えば、今回の訪中活動を通じて、参加者3人が以前より中国や中国語に対して強い関心を持つようになり、国際意識も高まったと見られる。

2.5 韓国語部門：金珍娥

2015年度韓国語ランゲージ・ラウンジは横浜校舎において以下のような日程と体制で週1回実施

した：

●横浜校舎

担当講師：高槿旭（コグヌク）

実施期間：春学期 2015年4月24日～7月17日（毎週金曜日）

秋学期 2015年10月2日～12月18日、2016年1月8日（毎週金曜日）

教室：明治学院大学横浜校舎 138教室

時間：12時30分～13時20分

人数：春学期 5～6人 秋学期 4～5人

担当講師の高槿旭先生から以下のようなことが伝えられた：

話す能力の向上を最大の目標とし、以下の内容を中心に進めた。

1. 韓国語の単語や人物、料理などの絵について韓国語で説明、語り合う

韓国語圏における絵付きの単語カード、人物、料理などの画像をダウンロードし、タブレットを用いて、提示された単語や絵について話す練習を行った。一人が単語について説明し、他の学生たちが質問するなどして単語の意味を当てるクイズ形式を導入した。

絵を用いることにより、韓国語の初級者でも意味を推測することができ、学生全員の積極的な参加が見られ、楽しく遂行することができた。討論などでは、「何を話せばいいかわからない」「思い出せない」など、消極的な態度も少なくないが、「絵を説明する」といった明確な目標を立てることにより、活発に進めることができた。

2. ① 趣味、② 仕事、③ 思い出といったテーマで討論を行う

①、②、③のそれぞれのテーマについて実施した。身近なテーマについて話すことにより、自分に関わる表現であるという意識から真剣さや能動性が確保され、とりわけ語彙力を中心に表現力を高めることができた。夏休みに韓国に短期留学を終えた学生が数人存在したことも効果的に作用し、全員が積極的に参加、総体として各自の話す能力が高まったと言える。

04

研究プロジェクト

04

「青少年の行動・防衛体力と体格に関する研究」

プロジェクトメンバー：森田恭光*、福山勝也、越智英輔（*：代表者）

本年度は、小学生と中学生を対象に、行動体力と防衛体力および体格との関連性について調査し、特に、有酸素能力と肥満度の関係に着目し検討を試みることを目的とした。実際に得られた知見は、学校現場にフィードバックした。今回の研究では、BMIによる体格のみならず、有酸素性体力の重要性も明らかとなったため、その視点からの運動指導プログラムを小学校現場に提供した。その結果、教員からの反響が大きく、授業のなかで有酸素運動を積極的に取り入れる活動が全校的になされたと聞いている。本プロジェクトの結果をもとに実施の授業に役立てることができたことは、本成果の重要性をあらわしているものと考えている。なお中学生のデータに関しては、現在持ち越し効果の観点から更に解析を進めている。

実施状況と今後の予定

1. 第1回目の調査

- 4月：実験内容の打ち合わせ・分析機器準備
形態・体格、体力測定、免疫応答、心理的調査内容、アンケート調査内容
- 5月：小学生約300名を対象に調査、測定実施
調査、測定結果をメンバーで分担し、統計処理（平均、標準偏差、一元分散分析）を実施。
- 6月：各分析データの結果を、メンバーで検討し、フィードバック内容を検討。
- 7月：フィードバック内容をまとめ、現場に中間報告実施

2. 第2回目の調査

- 8月：調査内容および分析方法打ち合わせ、調査用紙および分析機器準備
- 9月：小・中学生約400名を対象に調査、測定実施
- 10月：調査、測定結果をメンバーで分担し、統計処理（平均、標準偏差、一元分散分析）を実施。
- 12月：フィードバック内容をまとめ、現場に報告し、運動処方を作成した。

3. 第1回と第2回の調査結果をもとに形態・体力と肥満危険因子との関連性を分析

- 9月：第1回目および第2回目調査・測定データについて打ち合わせ
 - 10月：生化学的観点からのデータ内容分析
 - 11月以降：データの一部を研究会にて発表
- 主たる調査結果は、下記の通りである。

【目的】

成人ではBMIや有酸素性体力がメタボリックシンドローム（MetS）危険因子と関連していることが報告されている。しかし、小学生を対象にこれらの関連を検討した報告は少なく、かつ国内では

ほとんど実施されていない。そこで本研究では、小学生を対象に有酸素性体力とBMIからMetS危険因子との関連を検討することを目的とした。

【方法】

対象は小学4年生299名(男子140名,女子159名)とした。有酸素性体力は20mシャトルランによって評価した。MetS危険因子は腹囲、腹囲身長比、中性脂肪、高比重リポ蛋白コレステロール(HDL-c)、収縮期血圧、拡張期血圧の6項目を調査した。また、男女別に各6項目の標準化得点(z-score)を算出し、積算値をMetS得点とした。分析は対象を $\dot{V}O_{2peak}$ で2分位、BMIで2分位に分類し、MetS危険因子およびMetS得点を分散分析および多重比較によって検討した。

【結果】

男女ともに高BMI群は低BMI群よりもMetsリスクが高かった。加えて、高BMI/高体力群は高BMI/低体力群よりもMetsリスクが低かった。

【結論】

今回の調査により、小学4年生においては男女ともに高いBMIのみならず有酸素性体力が低いこともメタボリックシンドロームリスクを高める要因となっていることが判明し、日常生活活動において有酸素性体力を向上させる運動処方的重要性が示唆された。

「教養教育としてのカフェ」研究： カフェ・ネットワークの構築とその意義

プロジェクトメンバー：三角明子*、植木 献、上野寛子、猪瀬浩平（*：代表者）

〔猪瀬〕

2015年11月に、病院と社会を接合させるプロジェクトである「半外プロジェクト」の主催者である前川紘士氏、釜ヶ崎で貧困状況にある高齢者とアートプロジェクトを実践する原田麻以氏との意見交換を行うと共に、京都市内のカフェの空間をアートギャラリーとして活用するギャラリーPARCの視察を行った。

〔植木〕

本研究プロジェクトにおいては、授業時間外で学習者が自由に議論し、問題を発見・解決するための場（カフェ）をキャンパス内外を結び、いかに形成するかを探求してきたが、2011年以来的の様々な取り組みから見えてきたことのひとつは、飲食などの身体経験を媒介した場が議論の多様性を許容しやすいということである。

飲食が親密な関係を構築することは、経験則として承認されやすいものであるが、それが高等教育の中でいかなる役割を持つべきか検討するための事例を協同研究のかたちで4年間蓄積できたことは、本プロジェクトの成果である。

植木は昨年度特に横浜学生課との連携で、朝カフェや料理教室などを開催したが、学生たちは学部学科を越えた関係を築いていくと、逆に自らの専攻と関連させて物事をとらえたり、発言しようとする傾向が強まるように見えた。一度基礎的、身体的な共有体験を経た方が、相手に対する信頼感が増し、自由に自らの立場を表明しやすく、また異なる他者への感受性も高まるといえるのであれば、学問共同体としての大学のあり方を問う契機になるだろう。

また以前に猪瀬、植木が行ったプロジェクトにおいても、農的な経験が多様性を許容する一つの基盤となりうることを確認されており、農・食による多様性創出の可能性を近くまとめて報告したい。

〔上野〕

1) 学生活性型カフェ「きみは何のために働くのか！ー社会の一員として生きていくために重要なことー」(6月8日)を開催。大卒3年を経て各業界で活躍しておられる社会人4名を講師に迎え(SE2名、デザイナー、新人教育担当者)、人生における「仕事」の位置づけや社会人として重要な考え方、社会的役割についてのお話を聴き、学生たちの悩みを解決する糸口を見出し、数年後の自分を描くヒントを見つけるためのワークショップに27名の学生が参加した。

2) LGBTワークショップ第1弾「LGBTを考えようーあなたが本当に好きな人はだれ？ー」(6月12日)を開催。「LGBT」という言葉は普及してきたが、世間の壁は高く、まだまだ偏見や差別が根強い。GID元男性である深谷怜代氏に国内外の実態を紹介いただき、新しい価値観の創造を参加者とともに考えていくワークショップに41名の学生が参加した。

3) LGBTワークショップ第2弾「自分の性を考えようー自分の性別は自分で決める！！ー」(6月22日)を開催。多様な性のあり方について、深谷泰司氏(=深谷怜代氏)に実例を御紹介いただきながら、セクシュアリティについて考えるワークショップに14名の学生が参加した。

4) LGBTワークショップ第3弾「まわりにいるよ、LGBTs！」(10月5日)を本学セクシュアリティサークル「カラフル」との共催として開催。実際にLGBTsとして社会で活躍されている方2名のトークセッションを行い、その後ワールドカフェ形式で意見交換や感想の共有を行った。講師は北夙川不可止氏と池田季美枝氏である。18名の学生が参加した。

今年度は学生が自分の生き方について具体的に考えたり、新たな視点の習得を目標とし、社会においてさまざまな道で歩まれている方々との交流を行った。学生だけでなく、職員や教員の参加もあり、日本社会における実態や課題について把握し、みんなで議論できたことは大変有意義であった。さまざまな生き方を尊重できる人間を増やしていくために、今後もこのような形での企画は有効であると考えます。

(三角)

・「自分の〈強み〉を考えよう」

春季休暇中に本学学生および一般を対象としたワークショップを開催予定。

本学学生にはあらかじめバッキングム他(田口俊樹訳)『さあ、才能(じぶん)に目覚めようーあなたの5つの強みを見だし、活かす』を配布する。この書籍に付属するストレンクス・ファインダーテストのアクセスキーを利用してウェブサイト上で分析を受けたうえでワークショップに参加、自分の〈強み〉について考え語り合う機会をもつ。

一般参加者を受け入れることにより、〈強み〉とこれからの生き方、職業選択などの関連についての話し合いに厚みが出るのが期待される。

パワー系スポーツ選手における 下肢筋腱形状の特徴に関する研究

プロジェクトメンバー：黒川貞生*、亀ヶ谷純一、杉崎範英（*：代表者）

プロジェクトの目的

筋形状や腱形状には可塑性があることが知られており、長期的なトレーニングによって、そのトレーニング内容に応じた変化が起こる（e.g. Sugisaki & Kurokawa 2014）。そのため、スポーツ選手の筋腱形状を調べることは、当該競技を継続的に行うことによる筋腱形状やそれに伴う機能的特性の変化、あるいは当該競技において必要となる筋機能の解明において有用な情報を提供することとなる。本研究では、パワー系スポーツ選手を対象として下肢の筋腱形状の特徴を明らかにすることを目的とした。

方法

男子大学野球選手15名および男子大学バレーボール選手7名の測定を行った（今後、期末までに男子大学アメリカンフットボール選手および一般男子学生の測定・分析も行う予定）。また、一部の選手については、2月もしくは3月に再度測定を行い、スポーツ活動継続に伴う縦断的な変化も検討する。現在までに得られているデータについてその方法と結果を以下に示す。

超音波診断装置（SSD-2200およびSSD6500、日立アロカ社）を用いて、大腿部および下腿部の断面像をBモード撮像し、画像分析ソフト（ImageJ, NIH）を用いて以下の下肢筋腱形状の測定を行った（図1）。

- ▶ 大腿長50%位置における大腿前面の筋厚および大腿直筋の筋厚
- ▶ 下腿長近位30%位置における下腿後面（腓腹筋外側頭位置）の筋厚
- ▶ 外側広筋および腓腹筋内側頭の筋厚、筋束長、および羽状角
- ▶ アキレス腱および膝蓋腱の腱長

また、このほかに、布製メジャーを用いて、大腿長、大腿長50%位置の大腿周径、下腿長、下腿長近位30%位置の下腿周径の測定を行った。以上の測定データのうち、羽状角を除く測定項目については、体格の影響を排除するために身長に対する比を求めた。

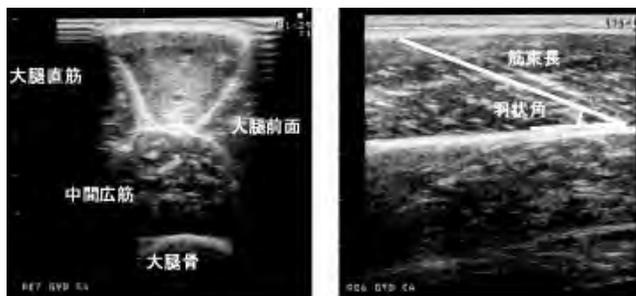


図1 Bモード超音波法による筋形状の測定
左：筋厚測定の場合（大腿前部および大腿直筋）
右：筋束長および羽状角測定の場合（腓腹筋内側頭）

すべての測定項目について平均値、標準偏差、および変動係数を求めた。また、対応のない検定を用いて種目間差の検討を行った。また、筋厚に及ぼす筋束長および羽状角の影響を検討するために、ステップワイズ法を用いて、筋厚を従属変数、筋束長および羽状角を独立変数とする重回帰分析を行った。いずれの統計検定においても危険率5%未満を有意とした。

結果

測定結果は、表に示すとおりである。測定項目のうち、外側広筋の筋厚、外側広筋の筋束長、および膝蓋腱長において、野球選手がバレーボール選手よりも統計的に大きな値であった ($p < 0.05$)。全被験者を対象とした重回帰分析の結果、外側広筋、腓腹筋内側頭ともに、筋束長（外側広筋 $\beta = 0.984$, $r < 0.001$ ；腓腹筋内側頭 $\beta = 1.621$, $r < 0.001$ ）および羽状角（外側広筋 $\beta = 1.059$, $r < 0.001$ ；腓腹筋内側頭 $\beta = 1.291$, $r < 0.001$ ）を説明変数とする有意な筋厚の推定式が得られた（外側広筋 $R^2 = 0.959$, $p < 0.001$ ；腓腹筋内側頭 $R^2 = 0.922$, $p < 0.001$ ）。また、いずれの群においても、筋腱形状のほとんどの項目において、変動係数10%を超える大きなばらつき（個人差）が認められた。

考察および結論

本研究の結果から、パワー系スポーツに分類される種目においても筋腱形状に種目間差が存在する可能性が示唆された。本研究では、対象としたいずれの筋においても、筋厚が筋束長および羽

表 形態および筋腱形状測定結果

		野球			バレーボール			全体		
		Mean	SD	CV(%)	Mean	SD	CV(%)	Mean	SD	CV(%)
体肢長	大腿長	0.24	0.01	3.3	0.23	0.01	3.5	0.24	0.01	3.4
	下腿長	0.23	0.01	2.7	0.23	0.01	2.4	0.23	0.01	2.8
周径	大腿長50%位置	0.32	0.02	6.7	0.30	0.02	6.4	0.31	0.02	7.5
	下腿近位30%位置	0.22	0.01	4.0	0.21	0.01	6.2	0.22	0.01	5.1
筋厚	大腿前面	0.034	0.004	11.5	0.030	0.003	9.3	0.033	0.004	11.9
	大腿直筋	0.017	0.002	13.6	0.016	0.002	13.8	0.017	0.002	13.5
	外側広筋	0.017	0.001	7.6	0.014*	0.004	26.2	0.016	0.003	16.6
	下腿後面	0.041	0.002	5.9	0.040	0.003	7.0	0.041	0.003	6.2
筋束長	腓腹筋内側頭	0.013	0.001	10.2	0.012	0.001	12.0	0.013	0.001	10.9
	外側広筋	0.054	0.008	15.7	0.045*	0.007	15.8	0.051	0.009	17.7
	腓腹筋内側頭	0.036	0.007	19.8	0.035	0.005	14.1	0.036	0.006	17.8
羽状角	外側広筋 (*)	19.3	3.0	15.3	19.0	4.9	25.8	19.2	3.6	18.5
	内側広筋 (*)	21.8	3.8	17.4	20.2	3.0	14.8	21.3	3.6	16.8
腱長	膝蓋腱	0.045	0.007	16.5	0.036*	0.005	14.8	0.042	0.008	18.7
	アキレス腱	0.12	0.01	7.1	0.11	0.01	9.8	0.11	0.01	8.0

羽状角以外の項目はすべて身長で除した値を示した。*は野球とバレーボールとの間の統計的有意差を示します ($p < 0.05$)。

状角の両者の影響を受けることが示された。しかしながら、筋厚の値が大きかった野球選手においてバレーボール選手よりも大きな値を示したのは筋束長であり、羽状角には種目間差は認められなかった。このことから、両種目における筋厚の差は筋束長の差によるものである可能性が高いと考えられる。このようにバレーボール選手と比べて野球選手において筋束長が長かった原因は不明であるが、近年の研究の中には短距離走選手において100m走のパフォーマンスに優れる選手ほど筋束長が長いとする報告 (Abe et al. 2000) や、スプリントランニングを含むトレーニングによって外側広筋の筋束長が増加するという報告 (Blazevich et al. 2003) がある。このことから、野球選手において外側広筋の筋束長が長かったという本研究の結果は、野球選手がベースランニング等のスプリントランニングをトレーニングの一環として取り入れていることが影響している可能性が考えられる。一方で、本研究で認められた筋束長やそれに伴う筋厚の差が、両スポーツ選手群における筋力トレーニングレベルの差に起因する可能性も考えられる。しかし、下腿の筋の形状においては両種目に差が認められなかったことから、本研究の結果を単純にトレーニングレベルの差と結論づけることはできず、各種目の特性と考えるのが妥当といえる。しかしながら、この点についてはさらなる検討が必要である。

また、本研究の結果、膝蓋腱長にも種目間差が認められた。これまでのところ、膝蓋腱長の種目差やトレーニングによる変化については明らかにされていない。本研究の(現時点の)内容からは、観察された種目間差が長期的なトレーニングやスポーツ活動によって生じたものであるのか、あるいは各種目の選手が先天的に有している特徴であるのかを明らかにすることはできない。この点について結論を得るには、一般男性との比較や介入研究を行う必要がある。また、膝蓋腱はアキレス腱などに比べ非常に短い腱であることから、分析精度も影響している可能性も含め検討をする必要がある。

参考文献

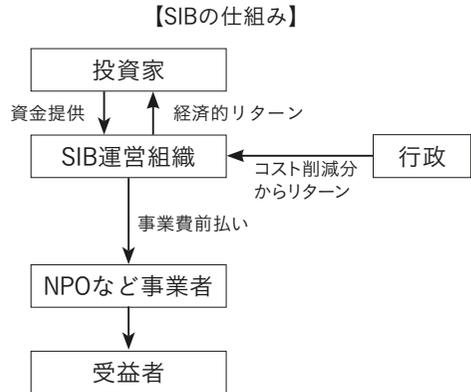
- Abe T, Kumagai K and Brechue WF. 2000. Fascicle length of leg muscles is greater in sprinters than distance runners. *Med Sci Sports Exerc* 32: 1125-1129.
- Blazevich AJ, Gill ND, Bronks R and Newton RU. 2003. Training-specific muscle architecture adaptation after 5-wk training in athletes. *Med Sci Sports Exerc* 35: 2013-2022.
- Sugisaki N, Kurokawa S. 2014. Effect of lower-body plyometric training on athletic performance and muscle-tendon properties. *J Phys Fitness Sports Med* 3(2): 205-209.

「ソーシャル・インパクト・ボンド(SIB)の犬猫殺処分ゼロへの適用可能性について」の研究

プロジェクトメンバー：原田勝広*、高木久夫（*：代表者）

〈プロジェクトの概要〉

ソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）は、従来、行政が担ってきた公的サービス、社会事業を専門性の高いNPOなどに任せ、それによって改善された成果を踏まえて、行政が投資家に対価を支払う仕組みである。必要な資金が税金ではなく、その事業に関心のある投資家から調達される点が特徴で、公的予算が不足するなか、福祉、労働、教育などで生産性の高いサービスを可能にする手法として世界的に注目されている。本プロジェクトでは、SIBを昨今注目されている犬猫の殺処分ゼロ実現に応用できないか、その可能性を探ることを目的としている。専門家の協力を得るため、SIB研究会を組織、3回の会合（明治学院大学学生、社会人に公開）を開催した。



〈SIB登場の背景と世界の導入事例〉

2010年3月、SIBが世界で最初に導入されたのは英国東部にあるピーターバラ刑務所での男性受刑者に対する出所後の再犯防止プログラムである。契約主体はSIB運営組織のSocial Impact Partnershipおよび司法省、投資家、Oneサービス（事業者）。Social Impact Partnershipがボンドを発行、投資家（慈善団体や基金）17組織から約7億円を調達。このお金でOneサービスが出所した男性受刑者に対しカウンセリングや職業訓練など社会復帰支援策を実施して再犯を防止する8年間のプログラムだ。

3000人の受刑者を1000人ごとの3つの集団に分ける。集団のひとつでも再犯率を10%低下させるか、3集団の平均で7.5%低下させると投資家は司法省側からリターンを得ることができる。仮に再犯率が10%下がれば、年率7.5%のリターンがある計算だ。中間評価では、再犯率は全国平均と比べ大幅にマイナスとなり、大きな成果を上げた。

この成功事例を背景に、その後、世界で導入が相次ぎ2015年末現在での導入は、英国（29件）を筆頭に、米国、オランダ、オーストラリア、韓国、インドなど10カ国において40件以上に及んでいる。市場規模は157億円にのぼる。分野別にみると、若者就労支援が34%でトップ、生活困窮者支援26%、子ども・家庭支援21%と続き、受刑者再犯防止11%、教育8%となっている。SIBへ誰が投資しているかを調べてみると、期待される金融機関は18%とまだ少なく、インパクト投資家、財団、篤志家が82%と大半を占めている。案件の規模別では、1-5億円が47%と半数を占め、5-10億円と10億円以上がそれぞれ13%と大型化が目立っている。

投資家のリスクを下げるための工夫もあり、事業者自身の出資ありが21%、償還者による元本の

一部保証ありが8%、財団等による元本の一部保証ありが5%などとなっている。

〈SIB導入の日本の現状〉

日本では少子高齢化が進む中、財政赤字が構造化しており、財政支出を抑制しながら、社会の抱える課題を解決するには民間資金を活用するSIBは極めて有用なツールと思われるが、残念ながら日本での導入実績はまだない。しかし、関心は徐々に高まっており、パイロット事業として現時点で4件がスタートしている。いずれも2017年度までには本格導入が期待されている。その4件は以下の通りである。

- ① 横須賀市における特別養子縁組——最も有望な事例がこれである。横須賀市に在住する妊婦で、子供を養育する意思、能力のない女性が出産した場合、全国の養親希望者とのマッチングを行う。家庭的養護と公的コストの低減を目指す。日本には、約85%、3万1千人の親のいない子供がおり、乳児院や児童養護施設で暮らしている。特別養子（実子）として育てられているのは年間400件前後である。同市は2013年度の人口減が全国トップであり、定住促進が急務となっている。市が有する児童擁護施設2つが満員となっており、行政コストの負担が大きいというのが現状。そこで、特別養子縁組を推進し、子孫に早期安定的な家庭擁護の機会を与え、児童施設の負担を減らす事を目標としている。養子縁組が4件成立すると、3530万円（18年分）、のコスト削減に繋がり、行政支出約1700万円の改善が見込まれる計算である。
- ② 福岡市等における認知症予防——高齢者施設で公文式の「学習療法」を導入、認知症の予防を図り、介護コストの低減を目指す。
- ③ 尼崎市における若者就労支援——尼崎市内の生活保護世帯のうち、就労が可能と思われる若者へのアウトリーチ（訪問支援）、就労支援を実施、社会保障費の低減、税収象を目指す。
- ④ 神戸市におけるがん検診——がん検診による早期発見、治癒により健康な人生と医療費の低減を目指す。

〈犬猫殺処分の現状〉

SIBについて、日本では、政府や自治体の多くが二の足を踏んでおり、まだまだハードルが高い。そこで、本プロジェクトは、動物愛護の視点から、SIBで犬猫殺処分ゼロを実現するスキームができなかと考えた。「2020年のオリンピックは東京が動物福祉先進都市だとアピールするいい機会」との考えから、女優の浅田美代子さんが「東京五輪までに犬猫殺処分ゼロ」というキャンペーンを開始しているのもいいタイミングである。また、環境省も犬猫殺処分ゼロを目指す「人と動物が幸せに暮らす社会の実現プロジェクト」を始動させた。公的予算が限られているなかで、こうした社会の強い要請に応えるにはSIBはぴったりのスキームである。

現在、日本では年間10万1,338頭（2014年）の犬猫が地方自治体の動物愛護センターや保健所に

引き取られ、二酸化炭素で殺処分されている。都道府県別では、①沖縄（4,474頭）②広島（4,019頭）③愛媛（3,861頭）④福岡（3,515頭）⑤山口（3,773頭）——の順となっている。

無責任な飼い主への啓発活動による遺棄防止キャンペーンや一部ブリーダーやペットショップへの飼育管理指導、元の所有者への返還も重要だが、どうしても限界がある。最近では、高齢ゆえに飼い続けるのが困難になったり、高齢者自身が亡くなるケースも多い。犬猫殺処分ゼロの国、ドイツでは、遺棄された犬などは「ティアハイム」と呼ばれる民間シェルターに收容される。日本でも、そういう民間シェルターを完備したり、トラウマを抱える遺棄犬を再教育して別の人（里親）へ譲渡したり、セラピー犬や災害救助犬として社会に貢献する犬への育成などを組織的に行う必要がある。そのためには、専門性の高いNPOに、事業を任せるべきだ。そのための投資資金はSIBで調達できる。殺処分が廃止となれば、大量の犬猫が殺されることなく社会に帰っていくという動物愛護の視点から大きな社会的成果を上げる一方で、殺処分にかかっていたコストを削減できることから、これを投資家へのリターンに充てることができる。

現在、犬猫については、自治体の保健所が捕獲、抑留して殺処分するケースと、動物愛護センターが引き取り、他に譲渡するか殺処分するケースがある。愛護センターの維持・管理費、建物の修繕費用のほか、殺処分のための薬代、処分後の焼却関連費などは全国で数億円規模とみられるが、建物の建て替えや関連人件費を考えるとかなりのコストがかかっているといわれる。

〈殺処分ゼロへのSIB導入の検討〉

殺処分ゼロに向けてのスキームは次のように設計した。①広島県神石高原町で犬の譲渡活動を展開しているNPO法人ピースウインズを事業者とし、殺処分されることになっている犬を殺さずピースウインズで訓練、教育し、その犬を新たな別の飼い主に譲渡する②ピースウインズの活動資金はSIBで民間から調達する③殺処分が減り、最終的に殺処分施設が不要となれば、県の施設コスト、これにかかっている職員など人件費が大幅に減るので、この分からSIB投資家に元本、配当を返す——というものである。

このスキームの対象自治体として、ピースウインズの本部があり、全国的にも殺処分数が多い広島県、および、新たにモールの中にペットランドの建設を予定しており、ピースウインズとの連携が可能な三重県の両県を対象として、SIB導入の可能性の調査・研究を行った。

◆広島県のケース

殺処分数ワースト1位を記録した事がある広島県では、施設維持費や管理費で1億5千万円のコストがかかっている。広島県の担当者も、この数を減らしたいという意向を持っていた。このため、その資金集めにSIBを使えないだろうか、という話し合いを広島県側と持った。担当者は以下のよう述べた。

- ① 動物愛護センターの耐用年数は50年でまだ16年ある。建て替え不要となればコスト削減となるが、現時点では期待できない。また、殺処分がゼロとなっても、狂犬病防止などの法的義務があり、殺処分処理場と一体となった動物愛護センターを完全になくすことはできない。
- ② 人件費は県職員と非常勤職員分があり、非常勤は5,192万円であるが、他の職務も兼ねており、雇用を停止するのは難しい。よって人件費は下げられない。
- ③ 外部への委託は3,556万円で、負傷疾病動物収容保護、定時定点引き取り、飼育管理、焼却管理などである。これはピースウィンズで代替できるものが存在する。

◆三重県のケース

平成28年度より現在ある場所に愛護センターを改築または新築の予定。設計費用については、(岐阜県は1億7,000万円だが)三重県はまだ発表できないという。新しい施設では、1ヶ月程度保護できる場所を作る計画があり、その間に譲渡する事で殺処分を減らしていく考えだという。担当者は以下のように述べた。

- ① 殺処分されている犬について、殺さず新たな飼い主を捜す方向に切り替える方針で、この面でピースウィンズと協力したい。まあ、病気や凶暴性で、譲渡が難しい犬を引き取ってもらい、終生面倒をみてくれることも期待している。
- ② 殺処分施設を含む愛護センターは現在公益財団法人が運営を担っており、職員は13人。例え殺処分ゼロになったとしても、どれだけ職員の仕事を減らせるか疑問である。四日市以外の保健所にいる職員もあり、すべて減らすのは困難である。また、センターに犬を運ぶ、注射などは他業者、獣医師会に既に委託している。
- ③ 例え殺処分がゼロになったとしても、処分施設は継続していかなければならない。「殺処分」という形が結局、一番コストがかからない。現実的にコストだけを見ても殺処分は減らないのではないか。

〈結論〉

今回の調査では、広島、三重の両県のケースをみても、殺処分ゼロに向けてのSIB導入については可能性は高いものの、クリアすべき課題は多い。課題のひとつは、現状ではコスト削減のめどが立たないことである。人件費については、職員等を解雇できないこと、施設についても廃棄は困難であるとの見解が示された。お役所特有の現状維持意識、改革意欲のなさがネックになっている。この点を変えないかぎり、歳出削減は困難である。業務を財団法人に任せている、場合によっては福祉団体に委託しているケースもあるようだが、どうしたらコスト削減が可能か、自治体の努力が求められる。

一方で、施設については、改革の余地が大いにある。例えば、犬の殺処分が100頭以下に減って

いる東京都の場合、「殺処分に回るのは、病気などで譲渡に適さない犬。これを殺さず、NPOが適切な場所で長期に飼ってもらえるならありがたい。こういう犬はどこの自治体も困っており、それぞれの数は少ないが、複数の自治体でまともればかなりの数になろう」と話している。各県とも、狂犬病の犬や野犬の存在を理由に、殺処分場の存続を正当化しようとしているが、説得力を持たない。殺処分数が減った段階で、そうした犬の処分場を関東、関西など地域で一か所に集める広域処理場を建設するとか、病気の犬はNPOに終生飼育を依頼するなどの方法で各県の維持コストを削減する工夫をすべきである。コスト削減ができれば、SIB導入のチャンスが広がるのは間違いない。

NPOもSIBへの関心は強いが、ここへ来て、意外なライバルが出現した。ふるさと納税である。ピースウィンズが、ふるさと納税の使い道ランキングで全国1位にランキングされるなど、動物愛護の財源として、ふるさと納税が一気に注目され始めた。北海道・旭川市（旭山動物園の運営支援）、神奈川県（県民に親しまれる新しい保護センターの建設）、大阪市（街ねこ事業）、福岡市（動物愛護事業）、徳島県（災害救助犬、セラピードッグ育成）、佐賀県（犬猫譲渡センターのオープン）など続々とふるさと納税での寄付を期待するプロジェクトが登場している。

また、もうひとつの資金源として休眠預金が注目されている。SIB自体が2010年に、英国でこの休眠預金をもとに開発されたという経緯があり、社会的投資モデルとして注目されている。休眠預金の社会的活用と合わせて導入が期待される。日本でSIBが導入された場合、合計6000億円以上の公的コスト削減効果が期待できるというミュレーション結果もある。

ただ、犬猫がかわいい、あるいはかわいそう、という感情に依拠した寄付だけでは心もとない。殺処分ゼロを実現するには、民間の資金を活用して、自治体の財政不足をカバーしていくという工夫が不可欠である。寄付が集まらない部分にも最終的に責任を持つ必要があるからだ。休眠預金の方は、SIBと組み合わせることで、大きな効果を発揮しそうだ。

従って、結論としては、動物愛護へのSIB導入については、制度的な問題、自治体の意欲、工夫の問題などハードルは高いものの、課題解決に向け有用なツールであることは明らかであり、そのハードルをどう越えていくかが問われているとあっていいだろう。動物愛護の分野でのSIBの登場の可能性は十分あるといえると思う。

※なお、調査・研究の中心となったSIB研究会は以下の通り会合を3回開催した。

(SIB研究会 第1回会合)

- 1, 日時 平成27年4月21日 18時から
- 2, 場所 明治学院大学白金校舎
- 3, 内容 「SIBとは？-現状と課題」(日本ファンドレイジング協会・鴨崎氏講演)

(SIB研究会 第2回会合)

- 1, 日時 平成27年6月26日 18時から
- 2, 場所 明治学院大学白金校舎
- 3, 内容 「政府の犬猫政策」(環境省 田邊氏講演)

(SIB研究会 第3回会合)

- 1, 日時 平成27年12月2日水曜日 18時から
- 2, 場所 明治学院大学白金校舎
- 3, 内容 「世界、日本のSIB案件の動向」(日本ファンドレイジング協会・鴨崎氏講演)

〈研究会メンバー〉(敬称略)

田邊仁(環境省)、澁谷智晃(東京都)、東久保靖(広島県)、大西健丞(ピースウィンズ)、國田博史(同)、勝又英博(食材研究所)、森利博(立命館大学)、鴨崎貴康(日本ファンドレイジング協会)、小泉義広(マリーナ・ファイナンシャル・サービス)、籠島康治(電通)、神尾由恵(イオンペット)、天野隆太郎(岡崎信用金庫)、野村香織(国連環境計画)、権藤貴志(農林中金)、中村実菜(明治学院大学国際学部)、原田勝広、高木久夫。

「対外漢語教育拠点」大学における留学生向け中国語課外教育に関する調査研究

プロジェクトメンバー：張宏波、洪潔清、渡辺祐子*（*：代表者）

本プロジェクトでは、中国の代表的な留学生向け中国語教育拠点を訪問し、課外教育に関する実態調査に取り組んだ。

I 首都師範大学(北京)訪問

(1) 9月下旬に首都師範大学を訪問し、外国人留学生向け中国語教育担当者および本学から1年間の長期留学を始めたばかりの学生にインタビューを行った。本学からの留学生については、学習環境や生活環境に関して不満はなく、充実した日々を過ごしているとのことだった。課外プログラムとしては、中国文化の体験プログラムが複数準備されており、本人は中国のニュース報道などを視聴する活動に参加していた。有料ながらHSK（世界規模で実施されている中国政府公認の中国語検定試験）対策講座も充実しており、日本では年に4回しか実施されない試験が毎月のように受験可能であるため、日々の学習成果を測定する目安にしやすいということだった。

(2) 12月下旬に同大学を再訪し、留学生教育を担当する国際文化学院の張静副院長ほか関係者にインタビューを実施した。

授業面では、筆記及び口述の試験のあとクラスが編成され、その後に本人の希望に応じて個別に調整することも可能になっている。

生活面では、日本人留学生の滞在する学生寮は1人部屋、2人部屋、4人部屋がある。当初は国籍を考慮することなく配置していたが、現在は出身国が同じ留学生が同室に固まらないようにしている。

課外教育としては、

(a) 各学期に「万里の長城」や「鳥の巣」などの社会参観、カンフーや劇、映画などの鑑賞を大学として定期的実施している。大学の運動会への参加も促している。授業の一環として北京の「老舗」商店を訪問する取り組みも行われている。

(b) 特徴的だったのは、大学が所在する北京市の政府や北京市海淀区政府が、市民と留学生との交流の場を定期的につつようにしていること。具体的には、歌や会食の場に加え、作文やスピーチのコンテストを主催している。そうしたイベント情報を留学生に伝え、参加を奨励し、参加学生をサポートする業務も学院として留学生辦公室とも協力しながら積極的に推進している。市民との交流については学院が主体となる形でもチャンス을設けており、北京市民の家に一日滞在するという機会も準備している。また、全中国規模の留学生イベントも増えており、参加を希望する留学生をサポートしている。

(c) 外国語専攻の中国人学生が留学生の様々な活動のボランティアを行っている。

(d) 外国人留学生会の活動にも経費面でサポートしている。留学生会は企業参観の企画、中国人学生団体との交流等、学内外の交流活動に積極的にかかわっている。留学を終えた後も、

就職するなどして現地にとどまろうとする学生が増えている。大学全体の学生活動センターで運動やグループ活動を行っている留学生も少なくない。

(e) 学院の留学生管理事務室には8名の専任教員がいて、日本語専門のスタッフも1人いる。学習や日常生活の悩み、体調不良などにも細やかに対応している。

(f) 様々な課外活動に積極的にかかわっている留学生には、活動そのもののサポートだけでなく、奨学金選考の際にプラス評価とするように配慮されている。

(g) 以上のような取り組みが評価されて、日本の文科省にあたる教育部から「来華留学示範基地」(留学生教育モデル校)の認定を受けている。

(h) 課外教育の効果としては、授業だけでなく現実の場で中国語を使う機会に多く触れることで、授業中だけでなく積極的に中国語を使ってみようとする学生が増えたとのことだった。

次に、国際文化学院で実際に留学生への中国語教育を担当している教員からもインタビューを行った。課外教育の担当者ではなかったため、普段の授業のなかでの取り組みを中心に話を聞いた。全体としては中国語を学ぶために留学しているだけに非常に学習意欲が高く、特別な工夫をせずとも一定の学習効果が達成されているという。それでも、近年は以前ほど積極的に学習しない留学生も増えてきたとのこと、そうした学生にとっては課外教育など多様な回路を準備して、学習動機を刺激する必要があることは認識されていた。

さらに、留学後2年目～3年目のカンボジア人留学生十数名のグループにインタビューする機会も得た。学習環境や奨学金の充実度、生活環境の面で一般的に満足度が高い様子が伝わってきた。中国での就職を希望する学生が多いことも印象的だった。

今後の課題としては、日本人を含めた留学生への聴き取りを実施し、課外教育の効果を確認することが必要である。これまで何人かの学生から断片的に話を聞く機会があったが、教育提供者の発想とのギャップが存在していたことが確認できたからである。また、留学生をサポートしている現地学生へのインタビューも行う必要があると考えている。継続調査を実施したい。

II 大連外国語大学(大連)訪問

(1) 10月上旬、大連外国語大学に留学中の亜細亜大学からの日本人留学生11名中5名を訪ね、留学生活が1ヶ月を過ぎた段階の学生たちへのインタビューとキャンパス見学を実施した。

(a) 学習環境：クラスは語学能力に応じて細かく編成され、入門、初級の各レベルだけで7クラスずつ設置されている。体験受講の後で、クラス変更も可能になっている。自分の語学力にあったクラスで学習できている点には一様に満足していた。日本の他大学や他国からの学生もいる混合クラスでは、他国からの留学生と違って「漢字」に頼ってしまい、〈会話〉能力が劣っていることを痛感しているという。

(b) 生活環境：食、住、スポーツなどの生活環境への満足度も高い。現地中国人学生との

2人部屋は清潔で明るい。郊外型の大学だが、3階建ての福利棟のほか、キャンパス周辺にも食事や買い物ができる店が多数揃っている。体育館や運動場も自由に利用でき、中国人学生や留学生同士の交流の場にもなっている。日本人留学生の感想として「キャンパスとバイト先、自宅の間を忙しく移動する日本での生活より疲れず、学習に集中できる」との言葉が印象的だった。市の中心部まで1時間近く要するが、格安の連絡バスが休日中でも1時間に複数台が運行されていた。

不満点としては、留学生のための事務手続きや生活に関する相談窓口が十分整っておらず、対応も不十分な点が挙げられていた。中国語能力の高い留学生や中国人学生に頼って自己解決している点は問題視されていた。

(c) 課外教育：亜大生は全員が寮で日本語専攻の現地中国人学生とペアで暮らしており、語学はもちろん、習慣や文化、社会、政治などをめぐって多面的に交流していた。日本語能力がきわめて高い中国人学生もいて、日本人学生が頼り切って中国語を使えないという弊害も自覚されていた。大学としては、そうした環境で学生同士が自主的な交流を展開することに期待していた。留学生を交えた文化祭、音楽祭も開催されている。

ペアになっている中国人学生2名にもインタビューしたが、ペア学生になることを希望する中国人学生30名以上から選ばれた11名だけに、積極的で能力も高かった。日本語専攻あるいは日本語ともう一つの専攻を有している学生が対象になっている。こうした共同生活を除けば日本人と直接話す機会は多くはないとのことで、ペア学生になったことに満足していた。

HSK（中国語検定試験）のための補講も準備されていた。これは亜大の留学プログラムに組み込まれているため、大連外大側が独自に対応して設置したとのこと。1ヶ月～2ヶ月間の集中講座となっている。

III 大連理工大学(大連)訪問

1月上旬、代表的な対外漢語教育拠点ではないものの、全国重点30大学の一つである大連理工大学の国際教育学院での留学生向け中国語教育についても調査を実施した（同学院は、遼寧省の「来華留学示範基地」指定を受けている）。孫成志副院長からの聴き取りの内容は以下の通り。

東北三省のなかでは留学協定数をもっとも多い大学の一つだが、理工系を中心とする大学であるため、中国語専攻の学部・大学院の正規留学生数はそれほど多くはない（学部は年間40名前後）。語学留学は最長半年間までの短期留学が多い。近年は、協定先大学からの要望に沿ってプログラムを組み立てる方が、高い満足度が得られるようになっている。国際教育学院の担当教員は30数名。留学生の出身国別では、日本からの留学生が減少し、パキスタンやイランなどのイスラム圏や東南アジア諸国、ロシア語圏からの留学生が増えている。理科系の大学院への留学は、中国語による授業と英語による授業の双方のコースが設置されている。機械系などには帰国後に即戦力のエンジニ

アや研究者として活躍する人材も多い。

課外教育も充実しており、中国文化の理解に関する複数の講座、スピーチや作文に関するイベント、スポーツサークルの運営、大学祭への参加などが活発に行われている。留学生の関心も高い。企業参観や国営企業などでのインターンなどの社会実践プログラムも用意されている。

特徴的だと思われたものの一つが、学生ボランティアによるチューター制度。学部への留学生なら4年間通じて1人の中国人学生がチューターを務め、学習から生活に関する多様な相談に乗っている。学内には文理の専攻を越えて300名あまりのボランティアが登録されている。学部留学生にとって最初の2年あまりは心強い存在で、普段から食事などをしながら交流が続いている。

もう一つが、中国人教員宅へのホームステイ制度。費用がある程度必要となるため（1ヶ月3万円程度、朝夕2食付き）人数的には限られるが、学生の希望者は少なくない。ホームステイ先では中国語以外の使用が禁止で、教員の子弟と日常的に交流できるケースも多いことから評価は高い。教員は海外経験を有し、学生と同世代の子どもを持つことなど厳しい条件をクリアした人だけが対象になっている。

また、豊富な学生対応経験を有する定年後の教員も、留学生のサポートに積極的にかかわっていることも特徴の一つである。

IV 大連市主催の留学生スピーチコンテストを参観

12月中旬、大連市所在の各大学に学ぶ留学生らが競い合うスピーチコンテストの様子取材した。大連に留学している留学生は1万人を越えるという。スピーチをした41名のほか、聴衆も500名上の留学生で熱気に溢れていた。

運営の中心を担っているのは、本学の提携校でもある大連外国語大学漢学院で、毎年優勝者を出すほど力を入れている（今年の優勝者の一人は日本人学生）。

代表としてスピーチしている学生の背後には、サポートする教員や応援する学生仲間の支えが大きいことが見ていて伝わってくる。今回の調査で訪問した大連外国語大学や大連理工大学では、副学院長クラスを含めて手厚いサポートを展開していた。

※1月以降の予定

(1) 大連外国語大学での継続調査：

1月中旬に、亜細亜大学からの5ヶ月間の留学プログラムの総括報告会が実施されるため、参加してインタビューを実施する。特に、最後の1ヶ月に彼らが経験した現地企業でのインターンシップに関する聴き取りを行う。

また、留学生担当の教員からも聴き取りを実施する。

(2) 東北師範大学での調査の実施：

2月中旬に東北師範大学において課外教育プログラムの現状に関するインタビュー調査を実施する。
※今年度の聴き取り調査を終えて

訪問先の大学には、2+2、3+1という形での留学を希望する学生、大学が世界中から訪れていた。語学力だけでなく、専門分野の能力と合わせて力を付けていくことが求められているといえる。中国語学科のない本学でも、各自の専門分野と中国語学習を同時に深めたいという需要の方が一般的である。多様な課外教育を通じて中国語学習を支援し、2+2、3+1という形での留学を可能とするような仕組みと支援体制を整備していくことが、今後の課題である。

05

研究業績

05

猪瀬 浩平

【著書】

- ・『むらと原発——窪川原発計画をもみ消した四万十の人びと』、農山漁村文化協会

上野 寛子

【学会：ラウンドテーブル】

- ・「話題提供①—明治学院大学「知的世界を楽しむためのアカデミック・スキル養成講座」」『こうしたら学生の学びは深まる：コーチングとピアラーニングによる学びのベース創り』初年次教育学会第8回大会（明星大学）、2015年9月

【学会：自由研究発表】

- ・「学生が心の底から学びたくなる“人生の必須科目”となるための10の努力」初年次教育学会第8回大会（明星大学）、2015年9月

洪潔清

【学会発表】

- ・「大學第二外語教學中文化導入の重要性」全球華語文教師與研究生論壇（台湾 2016年1月23日）

張宏波

【学会発表】

張宏波「戦争末期被擄中国战俘奴工与其社会影响—以日本神奈川県相模湖水库建设为例—」“社会群体视角下的抗日战争与中国社会”学术研讨会（南京師範大学）、2015年7月。

張宏波「战后中国对日友好外交的一贯性及战犯教育」“勿忘战争之痛、和平永在人心”國際学术研讨会（中国友誼促進会）、2015年9月。

福山 勝也

【著書】

「Materials Science and Engineering of Carbon: Characterization」

Chapter 3 「Small-Angle X-ray Scattering」

Tsinghua University Press and Elsevier 印刷中

【論文】

1. “Deuteration of Aromatic Rings under Very Mild Conditions through Keto-Enamine Tautomeric Amplification” *The Journal of Organic Chemistry* 80(10) pp.5144-5150 (2015年5月)
2. 「X線散乱法による金属塩水溶液からのナノ粒子生成および成長過程の考察」『カルチャー』(明治学院大学教養教育センター紀要) 2016年3月掲載予定

Grimes-MacLellan, Dawn

【論文】

Cultural consultants in the classroom: Harnessing international student mobility for intercultural learning. *Japanese Studies Association Journal* 13(1), May 2016.

【学会発表】

Transformational effects of service learning: The Great East Japan Earthquake Relief Project. Asian Studies Conference Japan (Tokyo). June 6, 2015.

Authentic pedagogy and participatory learning. The Culture of Study Abroad for Second Languages Conference (Halifax, Nova Scotia, Canada). July 17, 2015.

From volunteer service to community partnership: Learning through collaboration in post 3.11 Japan. Hawaii International Conference on Education (Honolulu, HI, USA). January 4, 2016.

◆上記のほか、所員の業績を、下記URLにて報告しております。

<http://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?courc=270000>

編集後記

今回もまた多くの方々から寄稿いただいた。御礼を申し上げたい。

とくに今号では、新たに同僚になられた方々の研究報告会発表稿が新鮮である。

そのなかにも言及があったが、自然科学分野をはじめとして、施設・備品等々の事情で、本来の研究を継続することが困難な所員がいる。多くの先輩が悩み、苦勞して乗り越えてこられた問題であろう。だからご当人に隘路を切り開いていただくしかないのであるが、付属研究所としてもなにかお手伝いできることはないかと考える。

とはいえ、あれこれ思うばかりでなにもできなかった。申し訳ないことである。任期中に着手することができなかったことがらがいくつかある。次期の所長に引き継ぎたい。

さいごになるが、頼りない執行部をがまん強く支えてくださった教学補佐の皆さんに深甚の謝意を表したい。ありがたいことである。

嶋田 記

2016年3月31日 発行

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 SYNTHESIS 2015

編集代表 嶋田 彩司

発行者 嶋田 彩司

挿画 土方 淳代

発行 明治学院大学 教養教育センター付属研究所
〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518
電話 045-863-2067

印刷 相和印刷株式会社

Printed in Japan

